

憐れな敵 《ヴィラン》 に魂の救済を

エキストラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヴイランさえも救いたいと願う少年の成長譚

D・Graymanのアレンをヒロアカに突っ込んでみようという試み。

転生者が特典でアレンのイノセンスを個性として手に入れるのは、転生者の心情の描写だとか原作知識に悩むだとか大変だなど思っただけで却下。

アレン本人をヒロアカ世界に介入させるor転生or憑依させるのも、イノセンスと個性は別物だし難しいだろうから却下。

という経緯でヒロアカ世界の住人にアレンのイノセンスらしきものを持たせることになりました。

目次

Opening―オープニング―	
立ち塞がった壁	1
入試結果	5
ちなみに技の名前を決めたのは師匠	12
学園生活スタート	
長座体前屈、片手だけ伸ばしました	16
コスチュームのデザインを決めたのも……	25
委員長決めと自主トレと救助訓練	34
後に起こる大事件の始まり	
救助訓練改め敵連合USJ襲撃事件	42
ヒーローならば、	49
ヴィランであつても、	56
敗北を糧に。	64
準備	69
●REC 孤児院	77

Opening—オープニング— 立ち塞がった壁

爆発音が轟く。喧騒が鳴り響く。金属片が辺りに散らばる。建物の瓦礫がそこかしこに散乱している。少年少女が我先にと機械へ向かっていく。機械は近くににいる人間に対して攻撃を行う。まさしく戦場のような空間が広がっていた。しかし、戦場のようであっても戦争ではない。これは実技試験。そう、雄英高校ヒーロー科の入学試験である。

試験が始まってどのくらいの間が経ったのだろうか。突然のスタートという合図に対して意味を咀嚼できず、遅れをとる事になった。

何が何でも合格したかった。ヒーローになることは幼い頃からの夢だったのだ。そのための努力だって積み重ねてきた。そのために何もかも捨てたといっても過言ではない。自分なら雄英高校合格も間違いないと信じていた。自分こそがヒーローになるのだと信じ切っていた。しかし現実には、甘くなかった。

遅れを取り返そうという焦りと、着実に仮想敵が減っているという緊張感、さらにはそんな環境下での戦闘による疲労、これらは時間すらわからなくなるほどに、自分を追い詰めている。

そして、薄れていた感覚は時間だけではなかった。気付くまでに時間が掛かった。否、気付く事が遅かったのではない。背後から迫っている存在に対して全く察知する事は出来なかったのだ。

その存在を理解した時には既に手遅れであった。振り返った時、事態は終わっていた。前方には0ポイントの大型仮想敵がこちらに向かってくる。あまりの大きさにまだ距離があるにも関わらず眼前に迫っているかのように感じられた。自分は落下してきた瓦礫に足を挟まれ身動きが取れない。もう自分にはどうする事も出来ない。回避する事も、防御する事も、身を守る事は何一つとして出来なかった。

ただ一つだけ、助けを求める事以外は。

思わず溢れ出たその言葉は本心からだった。たとえこの場が試験であり、その後治療を受けられると頭では理解していても、その恐怖心は紛れもなく本物であった。

それは単なる弱音である。実際に救援を望んでいたわけではなかった。しかし抑える事は不可能だった。抑えきれなかった。感情と共に溢れ出てしまった。

「……誰か……救けて」

いつの間にか視界がぼやけていた。眼が熱くなっていた。頬が湿っていた。もう諦めていた。しかし確かに聞こえた。自分の本心に、弱音に、応える声が。

「大丈夫ですよ。僕が救けます」



聞こえた。気づいた。ならば救ける。それを求められて、僕が応えられるなら動かない理由はない。声が届いたことから距離はそう離れていない。地面には仮想敵の残骸や瓦礫が散らばっているが、それらを最小限避けて走る。助けを求めた声の元へと駆け付けた。そして安心させるために声をかける。

「大丈夫ですよ。僕が救けます」

気付いていなかったのか、救ける、という言葉にこちらを向く。その表情には怯えだけでなく疲労の色が濃く見られる。脚を圧迫している瓦礫を持ち上げると重傷ではないが決して軽くはない怪我を負っていた。この負傷ではおそらく一人で移動することさえ辛いのではないか。この窮地を脱したとしても試験を続行できるとは思えない。安全な場所へと避難させる必要があるだろう。

周囲にはもう受験者の姿はない。あの脅威を目の当たりにして急いで避難したのだろう。つまり他に助けが来ることはない。僕ももう少し離れていたら迷わずこの場から逃げていた。しかし幸いにも声が届く範囲に僕はいた。ただそれだけの事である。

今取ることの出来る選択肢は二つ。一つは負傷者を背負いこの場から急いで離脱する。もう一つはあれを無力化する。前者の行為のほうが救助活動としては相応しいだろう。だが目の前の人物はそれを受け容れるだろうか。

「僕が背負います。急いであれから逃げましょう」

段々と落ち着きを取り戻してきたらしい。その顔には恐怖は消え代わりに羞恥、怒りのようなものが浮かんでいる。

「……………ふざけるな。誰が……………借り……………か」

発声もままならないほどの疲労状態で主張している。その眼には強い意志が宿っていた。どうやら自らの安全よりも何よりもプライドを優先したいようだ。これはあくまで試験であり学校側も死人は出さないだろう、といった思考になったのかも知れない。

このまま一緒に逃げようとしてもこの人はそれを拒絶するだろう。無理に連れて行こうとしても共倒れになる可能性が高い。

「わかりました。そこから動かないでください」

「何を……………言つて……………？」

全壊させることは出来ないとしても動きを止める。もしくは別の場所に誘導する。ただ機動力に自信はないため、誘導するにしても少しは破損させなければならぬ。まず全力で攻撃しその結果で行動を決める。

「個性発動」

攻撃のために個性を発動させた。左腕が銀色の鉤爪のような形態へと変化する。あれを止めるにはまだ足りない。より強くより大きくなければならない。心を落ち着かせ集中する。この力は未だに十全に扱えるわけではない。最大解放時には細かいコントロールが効かなくなり、その力をぶつけることしか出来ない。しかし今はそれで十分。

「十字架（クロス） 最大解放」

イメージする。強靱で巨大な左腕を。

叩きつける。他者を守るために、助けるために。

「十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）!!」

渾身の一撃を叩きつけた。巨大ギミックの半分ほどの大きさになった左腕による攻撃は、相手を壊すには足りなかった。しかし、受け止めることはさせない。

「はあああああっ!!!」

壊すことは出来ずともバランスは崩させる。行動不能にしなくては意味がない。

何のためにここいる。どうして逃げなかった。それは助けるためだろう。一度しか口にはしなかったけど、確かに聞いたんだ。だから助けるよ。そのための僕だろう。

とても長い時間拮抗しているように感じられたが、実際にはほんの一瞬の出来事だったのだろう。

巨大ギミックは攻撃に耐えきれずバランスを崩して倒れた。

それは格好いいものではなかったかも知れない。この救助中にポイントを獲得出来なかったことで試験には落ちてしまったかも知れない。

それでも僕は満足していた。自分の個性で人を助ける事が出来るのだと証明されたのだから。

「僕はなるんだ、全てを救う存在に」

これは僕が救済者になるまでの物語

入試結果

雄英高校ヒーロー科実技試験から数時間が経過した夕方。この日ブライド故に救助される事を拒んだ人物を助ける為、巨大ギミックを退ける事に成功した少年は、全力を尽くした事によりその後気絶した。そして現在、正座をしていた。

その場所はいくつかの机と椅子が置いてあるごく普通の事務室である。そこにいる人間は二人だけだった。一方は中肉中背の身体を強張らせ正座している白髪の少年。もう一方は、白衣を着た女性。肩まで伸びているストレートの黒髪を手櫛で整えながら椅子に腰掛けている。体格は変わらないはずの二人だったが明らかに一方が小さくなっていた。そして椅子から見下ろされていた。

「禁止されていたにも関わらず個性を最大解放してすみませんでした」

一息に謝罪を述べると頭を床にぶつかるまで下げた。少年は正座から土下座へと姿勢が変化させる。しかし目の前で椅子に腰掛けている女性の表情は、全く変わらない。その顔は笑みを浮かべている。口角を上げて白い歯を少し覗かせている。紛れも無い笑顔だ。しかしその眼だけは鋭く少年を睨みつけていた。

「なあ。おい、アレンよ。最大解放は訓練がまだ終わってないから試験じゃ使うなと言ったよな。何度も何度もさあ。いや、ひよっとしたら、私の勘違いだったかな？ まだ老化が始まってるとは思ってなかったけど、もうボケ始めたのかなあ？ どう思うよ、アレン？」

女性は髪を左手で梳かしながら、一定のトーンで言い切った。表情に変化はなく、その視線はずっと少年——アレンから離れなかった。

「し……師匠はまだ若いのでボケではな——」

「そんなんわかってんだよ!! 私に聞きたいのは、お前は禁止されたのを、ちゃんと理解してんのかってことだよ!!」

師匠と呼ばれた女性にとってアレンの返答は期待外れだったらしく怒鳴り声が響く。その言葉にアレンは閉口し俯いてしまう。そんな弟子を見て女性は溜め息を吐く。

「……っはあく。私も試験は見てたからわかるさ。助ける為だったんだろう、アレン？ でもな。何度も教えてるが、助けていいのは自分の手が届く範囲までなんだ。昨日のは確かに結果的には救えたよ。それは良かったな。しかしだ。可能性で言えば、最大解放を制御しきれず暴走して、お前自身が大怪我になるかも知れなかった。良くはないがそれだけならまだ良い方だ。最悪、暴走によって助けようとしてた奴まで巻き込むことだってあり得たんだ。わかるよな？」

女性は先程までの感情的に怒鳴っていた時とは異なり、諭すような口調で語りかけた。同意を求められたアレンは顔を上げ口を開く。

「……分かってます。解ってはいるんです。自分でも馬鹿な台詞だと思いますが、頭では理解しても心では納得できません。今冷静に考えれば、試験なんだから死ぬわけじゃない。怪我しても治すことができます。助けなくても大事にはならなかったって。……でも、聞こえちゃったんです。助けて、ってこの耳に聞こえたんですよ！ したら、気づいたら既に身体が動いてて」

「もういいよ。喋るな」

女性は左手で顔を覆いながら、アレンの話を中断させた。アレンの話では、このまま説教を続けたとしても意味がないと女性は考えた。これはアレンの心の問題であり、長い時間をかけなければ解決できないと結論を出した。

「ひとまず、説教は終わりだ。正座ときな」

「……ありがとうございます」

説教が終わったことでアレンはもう一度頭を下げてから立ち上がる。そのまま部屋を出ようとしたところで、女性に呼び止められた。

「ちよつと待て。説教は終わりだが、罰をまだ与えてないからな」

「罰ですか？」

「師匠との約束を破ったペナルティだよ。あるに決まってるだろ」

「そうですね。師匠がペナルティを与える機会を逃すなんて有り得ないですね」

「アレン、お前ちよつと余裕あるだろ？ さては反省してないな……」

アレンは墓穴を掘ったと呟き、項垂れる。女性はニヤニヤと笑みを

浮かべながらペナルティ案を挙げていく。

説教が始まった時と似たような光景だが、先程とは異なり師弟ならではの親密さが表れている。

「よし決めた！ 『僕、亜蓮行人は約束を破った悪い子です』 って書いたプラカードを腹と背中につけたまま施設の掃除1週間にしよう」

「ええ?! ……いえ、今までののに比べたらマシな方ですね」

「そうか。なら修行もいつもより厳しくするか……死にかけるレベルのやつ」

「師匠？ 恐ろしい単語が聞こえた気がしたんですけど?!」

「気のせいだといいな。せいぜい祈ってる」

「プロヒーローの台詞ですか？ それは?!」

「何言ってるんだ。むしろヒーローだからこそその台詞だろ？ 祈る時間与えてやってんだぞ。慈悲深いだろ」

師弟の間に価値観の相違が発生していた。

「この件については、取り敢えず以上だ。さつさと夕食の準備しとけ。チビたちも腹すかせてるだろうしな」

「はい。失礼しました」

アレンは軽く頭を下げ部屋を出た。部屋に残っている女性は椅子に座りなおし書類を取り出した。ヒーローとは別の兼業に関する資料をまとめ始める。

彼女はプロヒーローであるとともに孤児院の経営も行なっている。孤児院では積極的に子どもを受け入れることはなく、彼女のヒーロー活動中に関わった、保護者を失い身寄りのない子どもを受け入れている。現在、孤児院ではアレンを含め5人の子どもを育てている。年齢に多少の差があっても、基本的に子どもたちの仲は良好である。

——決して私からのペナルティを恐れて仲良くしているわけではない。私は恐れられてなどいない。親しまれていると言っているわけではろう。むしろ敬われている、いつそ崇めたてられていると表現しても過言ではない。

「……過言だろ。……集中できてないし朝食の後にするか」

彼女はそう呟くと資料を元の場所に戻し大きく伸びをした。

「修行はどんな内容にしてやろうかな」
彼女は楽しそうにやりと笑った。

◇◇◇

入試から1週間後、二枚のプラカードを腹と背中にぶら下げ窓を拭いている少年がいた。つまりはペナルティ中のアレンである。

その横には、7歳程度の少年少女がついている。二人は不満そうな表情でアレンに話しかけていた。

無邪気な子どもそのものである。その無邪気な子どもが『悪い子どもと書かれたプラカードをぶら下げて掃除をしている兄』に対して好奇心を抱くのは当然と言える。

「ねえねえ。遊ぼうよ」

「そうだぜ！ もうユキトのカッコにも飽きた！」

二人はペナルティが始まってから、ずっとアレンを揶揄っていた。しかし1週間も同じでは慣れてきたらしく、単純に遊び相手を要求していた。

悪意がないのであれば、叱りつけるのは良くないだろう。ここは落ち着いて宿題でもやりなさいと窘めるべきだろう。それが大人の対応である。

「うるさいですよ。さっさと離れないとこれからの夕食は毎回ピーマン、ナス、トマト、セロリを入れます。……あとおやつはサルミアツキの飴にする」

アレンもまた子どもだった。15歳の少年に大人の対応は出来なかった。それだけの事である。そんな少年の対応に恐れ慄く子どもたち。

「おれたちの嫌いな物を毎日食べさせるだと！ 悪魔のシヨギョーだ!!」

「そうよそうよ！ 世界一マズイ飴をおやつにするだなんて!! ショッケンランヨーよ!! オーボーだわ!!」

本気で嫌がる子どもたちはより一層アレンに縋りつき反対する。

そんな二人の様子に、アレンは対応を間違えてたか、と辟易する。

「冗談。冗談ですよ。このままだと掃除できないのであつちで遊んでください」

「ホントに？ よかった。焦ってソッパしたぜ！」

「いえ、いつユキトお兄ちゃんの気が変わるかわからないわ！ 早く離れましょう！」

アレンの冗談が余程効いたのか、子どもたちは走ってその場から逃げ出した。

すると同じ方向から一人の少女が歩いてきた。ショートカットで揃えた髪型に長い手脚に透き通った肌を持つ少女である。

「相変わらず、行人は兎季子と獅郎に懐かれてるわね」

「あれは懐かれてるっていうより馬鹿にされてると言った方が正しいですよ、硝子」

「どちらにしても親しまれている事は変わらないでしょう。大差ないわよ。私なんて、ショーコお姉ちゃんには逆らえないわ！ って直接言われるのよ。私と行人とは一歳が離れてるだけなのに、どうしてこうも違うのかしら」

硝子は微笑みながらアレンに話しかける。兎季子と獅郎同様、アレンを揶揄って楽しんでるようだ。二人と異なる点は、余裕を持っているかどうかの差だろう。

「自虐かと思いきや自慢だったとは……。その手に持っているのは？

ああ……そうか」

「お察しの通りあなた宛の郵便物。雄英からよ」

「そうですね。僕の部屋にでも置いてください」

「あら？ 結果は気にならないのかしら？」

アレンの態度は自らの進路に関わる重要なものとは思えない素っ気なかった。アレンの様子が予想していたものと違っていたらしく、硝子は首を傾げる。

「筆記試験はこの前自己採点したら合格ラインに届いてました。それに実技を見ていたららしい師匠の態度はいつも通りでしたから。まず合格でしょうね」

「へえ。なるほど。……毒島先生は雄英にいたのね」

アレンの言葉に硝子は納得したらしく頷いた。そしてアレンの師匠である毒島について確認する。

「実技試験は大勢の怪我人が出る可能性の高かったですから、雄英にも保険医はあるでしょうけど師匠は念の為に呼ばれていたのではありません」

「そう。まあいいわ。これは行人の机に置いておきます。ではペナルティの掃除頑張って」

そう告げると、硝子は背を向けて手をひらひらと振りながら去っていった。

一人になったアレンは窓拭きを再開する。

「これで不合格だったら恥ずかしい……」

彼の呟きは誰にも届かず、キュツキュツと窓と雑巾の擦れる音にかき消された。

数十分後、窓拭きを終えたアレンは迅る気持ちを抑えて廊下を歩き自分の部屋へと向かう。

孤児院の子どもの中では最年長であるアレンは、受験生という事もあり一人部屋が与えられていた。この事が決まる際、獅郎たちは暴動を起こした。しかし次の年には自分も一人部屋を貰えると察した硝子により鎮圧された。

自分の部屋にたどり着いたアレンはゆっくりとドアを開けそつと入室した。すると今までとは別人のような速さで机に向かう。

机の上には雄英からの郵便物が無雑作に置かれていた。入学試験の結果がこの中にある。その事実のアレンの身体が固まる。緊張しつつも決心のついたアレンは開封した。



アレンが部屋を出るとそこには、硝子がスマートフォンを片手に構え立っていた。そしてそのままアレンに尋ねた。

「結果は？」

「もちろん合格ですよ」

アレンは喜びを隠しきれない笑顔で、そう答えた。

ちなみに技の名前を決めたのは師匠

アレンたちが暮らしている孤児院は、毒島がプロヒーロー『ドク』として運営している事務所と同じ敷地内に建てられている。その理由は子どもたちの世話や教育を『ドクヒーロー事務所』の孤児院担当職員が行なっているからである。実際に毒島自身が孤児院にいることは少ない。1ヶ月に1度責任者もとい保護者として子供たちの顔を見に行きお小遣いを渡すためにしか行かない。

毒島は孤児院の他に医者も兼業し、ヒーロー活動で救助した被害者のアフターケアまで勤めている。

「つまりだ。私はとても忙しい。知ってるな、アレン？」

「……何がつまりなのかはわかりませんが、忙しいという事は知ってます」

毒島とアレンの二人はジャージを着て、事務所に併設されているトレーニングホールにいた。その大きさは市立の体育館以上にもなる。

アレンは雄英高校から合格通知を受けた日の翌朝、毒島から呼び出を受けてまだ日も昇っていないような時間にその場所へ来ていた。

「知っていればいい。……ところで昨日、合格がわかったらしいな。とりあえず言っておこうか。合格おめでとう」

「はい。ありがとうございます。今日伝えようと思ってたんですけど、誰から聞いたんですか？」

アレンは祝福の言葉に感謝しながらも、まだ伝えていないはずの試験結果を知っていたことに疑問を抱いた。

「ああ、それはな。昨日の夜、硝子から動画が送られてきたんだよ」

その瞬間アレンは察した、あの時動画を撮られていたのだと。「動画を再生してみたら部屋から出てきた子どもがすっごい嬉しそうな顔で『もちろん合格ですよ』って言ってな。その後すぐ顔赤くして照れてやがんの。慌てて顔かくしてな。思わず笑っちゃったよ」

「……………え？」

アレンの想像の斜め上をいっていた。嬉しそうな顔には心当たり

があっても、その後の動作にまるで覚えがない。編集を加えた動画を送ったのである。どこでそんな技術を身に付けたのか、硝子の押揃う事へのバイタリティはアレンの予想出来る範囲を超えていた。

「言うまでもないと思いますけど、師匠。それは脚色されてますから間に受けないでください」

「なんだ。本当は不合格だったのか、アレン？」

「いえ、合格は本当です」

アレンは疲れた。今はまだ早朝だというのに疲れ切っていた。何故自分はこんな時間にここにいるのだろうか、と悩み始めるほどアレンは疲れていた。

そんなアレンを見て毒島はにやりと笑い口を開いた。

「まあ、冗談はここまでにしとくか」

「はい。なるべく早く本題に入って貰えると助かります」

割と切実なアレンの頼みであった。

「今日ここに呼び出したのは、十字架(クロス)の最大開放の訓練が最終段階に入るからだ」

「もうですか？ 予定ではもう少し先という話でしたが」

「ああ、お前が試験の時に無茶したからな。予定が狂ったんだよ。あの時お前は暴走することなく十字架(クロス)を発動させた。後で気絶こそしたが怪我もなかった。だから、最後の仕上げを入学するまでに終わらせることにした」

アレンはなんだかんだであの時助けようとして良かったなどと、内心で考えていた。

「今お前の考えていることは、手に取るように分かるから釘刺しておくぞ。反省してないと私が判断したらいつでもペナルティは再開するからな」

「そんな事はないですよ。後悔はしてないですけど、反省はしっかりしています。……早く訓練を始めましょう」

「まあ、そういう事にしといてやろう。……肝心の訓練の内容だが簡単だ。アレンは暴走するまで限界まで十字架(クロス)を発動させる。そして限界を少し超える。暴走する。そこで私が強制的に眠らせる。

叩き起こす。これを繰り返して限界まで発動させる状態に身体を慣らす」

「それ、大丈夫なんですか？」

「場所のことなら気にするな。大金注ぎ込んで建てたから、頑丈だし防音もしっかりしてる。お前自身の事なら安心しろ。試験の時は怪我してなかったし多分平気なはずだ。ここ1週間の修行も耐えられたしな」

ペナルティを言い渡した時はついでのように、修行を厳しくすると決めたようだったがこの訓練の為の下準備だったらしい。

「この訓練で重要なのはイメージだ。十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）の訓練の時にも教えたな。同じ構えから同じ動きで同じ攻撃をする、このイメージを頭に擦り込めよ」

そもそも十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）とは、十字架（クロス）の発動が不安定だったアレンに毒島が覚えさせた技だった。

安定して十字架（クロス）を使用している状態での攻撃行為を、必殺技として身体に定着させたのである。これを身に付けるまでアレンは、十字架（クロス）に対して恐怖心を抱いていた。恐怖心を克服する為の毒島による一種の治療行為でもあった。

「この訓練は十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）をわざと不安定にさせるんですよね？」

毒島の話では、これから行う訓練は今までに身に付けたものとは、正反対の行為だとアレンは考えていた。

「ああ、だが全く違う事をする訳じゃないからな。今のレベルで固定されている必殺技を数段上のレベルまで引き上げるんだ。前やった時は、まだまだ身体が鍛えられてなかったからな」

毒島は、アレンの訓練に対する認識を正しいものに改めさせた。

「……ていうか、これはお前が実技試験の時にやった事だぞ。100%の力ではなかったようだけどな。こっちは身体の成長だったりを計算して訓練内容とか計画立ててるのに、勝手なことしやがって」

毒島は話しながら、様々な思いが湧いてきたらしく顔から徐々に表情が消えている。

そんな話を聞きながら、アレンはその時の事を思い出し出していた。目の前で師匠の顔が恐ろしいものへと変化している事実から逃れたいという願いが働いたのではない。毒島の言葉に少し気にかかるものがあったのだ。

——あの時、僕は何の迷いもなく本気で十字架（クロス）を使用していた。あの脅威を止めるため全力を尽くしていた。助けを求める声に応えるために、自身の全てを使うつもりだった。

しかし、師匠曰く、あれは全力ではなかったらしい。まだ先があるという事だ。それなら納得できることはある。暴走せずに怪我を負わなかったことだ。しかしこれは一体どういうことなのか。何故、僕の意思に反して100%の力が出ていなかったのか。

「目標は100%の十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）を使っても怪我なく気絶せず、だ。とりあえず、これで説明は終わりだ。さっさと始めるぞ」

入学までに完成させてやる、とアレンは決意とともに頭を下げる。

「よろしくお願いします」

個性を発動させて、左腕が赤黒いものから銀色の鉤爪状に変化させる。そのまま左腕に力を込め、構え、叫び、放つ。

「十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）!!!」

アレンの必殺技の訓練が始まった。



そして、時は経過し季節は春を迎える。

学園生活スタート

長座体前屈、片手だけ伸ばしました

雄英高校入学の日の朝、アレンはドクヒーロー事務所に来ていた。そこには当然毒島もいた。この三週間、早朝はずっとトレーニングホールで訓練を行っていたが、その日は違った。今回は二人の服装が訓練時のジャージ姿とは異なる。一方はブレザーの制服、もう一方は白衣を着ている。

「必殺技威力向上訓練は昨日で終わった。だから今日は、高校生になるお前に改めて釘を刺しておく」

毒島は真面目な口調でアレンに話し始めた。アレンは直立した姿勢のまま背筋を伸ばし話を聞く体勢になる。

「これは何度も何度も言ってる事でアレンも耳タコだとは思うが、『助けていいのは手が届く範囲まで』だ。自身の能力を超えたところに首を突っ込んでも、余計な被害が増えるだけだ。だから自分の限界はどんな時でも忘れるなよ！この訓練でそれも明確になったからな」

「はい、出来る範囲で頑張ります」

「これまでの訓練と違って高校では実戦だってあるんだ。そこは間違えるなよ」

伝えたい事は話し終えたのか、毒島はふうと一息つく。そして表情を少し和らげ会話を続ける。

「結局、100%をコントロールするまでは出来なかったな。現時点で出来ないんだ。しばらくは無理だろうから無茶すんなよ。80%くらいは完璧にコントロール出来たんだ。それだけの威力があれば戦闘には十分だ」

「……そうなんですか？ 僕は入学までに100%をコントロールするつもりだったんですけど」

「当たり前だろ？ 80%でもよほど戦闘に特化したヴィランでもない限り十分な威力だ。他の技術を身につける方が優先順位は高いぞ。

……それに副産物ではあるが、妙な能力も手に入れたしな」

アレンは訓練において目標であった『100%の十字架ノ墓（クロス・グレイヴ）を使っても怪我なく気絶せず』は、達成できなかった。しかし幾度となく限界を超える行動を繰り返した結果、予想外の力を身につけた。

「はい。あれのおかげで戦いの幅が広がります」

「……戦いの幅……か」

毒島はアレンの言葉に何か思うところがあったのか少し考え始める。そんな師匠にアレンは疑問を抱いたのか質問を投げかける。

「どうかしたんですか、師匠？」

「アレン、お前の夢はなんだ？」

「え？」

毒島はアレンの疑問に答えず、逆に問いかけた。そんな唐突な言葉に面食らいつつも、アレンは素直に返答した。

「ええと、はい。……僕の夢は全ての人を救うヒーローになる事です」
荒唐無稽な夢だ。現実を、世間を、残酷を知らない、無知で無垢な幼い少年が抱くような夢である。しかしそんな夢を、現実も世間も残酷も知っている幼くないアレンが真剣に話していた。

毒島は軽くて頷くと口を開いた。

「そうだ。それがお前の夢だったな。現実味がない事はこの際置いておこう。『救う』という事において戦闘力は絶対的なものではない、もちろんあるに越したことはないが。そもそも戦闘つてのは手段の一つでしかない。戦わないで済むならそれが一番いい。最も被害が小さいからな。わかったな？」

「わかりました。自分の限界を踏まえて行動する。戦闘はあくまで『救う』為の手段、ですね」

アレンが理解した事を確認した毒島は、軽く伸びをして続けた。

「まあ、細かい事は学校で学べ。そのためのヒーロー科だ。あそこは教師も優秀だしちゃんと言うこと聞けよ？」

「はい。……もしかして、これから師匠との訓練はなくなるんですか？」

何かを期待するような、不安を抱えているような様々な感情が混在

した不思議な表情でアレンは尋ねる。

「……基本的にはな。ヒーローとしての心構えだとか知識なんかは学校でだ。私に時間があれば個性の訓練くらいなら見てやる。感謝しろよ?」

笑顔でそう答えた毒島に、アレンもまた笑顔で感謝を伝えた。

「ありがとうございます良かったです嬉しいです」

「感謝の気持ちが見えないぞ。気にしないけど」

「……いや、師匠との訓練は結果は出るから嫌じゃないですけど、すごい辛いんですよ。怪我はないから身体は大丈夫でも精神が保ちません」

「別に問題はないだろ? 今、普通に会話出来てんだから精神に異常はない」

毒島はアレンの苦情を何でもないように返した。

「とにかく、雄英高校入学はお前にとってのスタートラインだ。これからヒーローとしての基礎を学ぶ事になる。大変だろうけど頑張れよ、アレン。言いたい事は以上だ。遅刻しないようにさっさと行ってこい」

「はい、行ってきます」

そう告げたアレンは出口に向かって歩く。ドアの前で立ち止まり、振り返って一言。

「今までありがとうございます! これからもよろしくお願いします!」

そしてすぐに出ていった。毒島を残す部屋には徐々に遠くなる足音が響いていた。

アレンが遠ざかる音も届かなくなったところ、毒島は呟いた。

「……漸く、一段落着いたな。ふう……この先あいつは何をするんだろうな……」

毒島の溢した言葉は誰にも聞こえる事はなかった。

そして、毒島との会話の後、急いで登校したアレンは遅刻することなく教室にたどり着いた。

ドアを開け中を覗くと教室にはほとんどの席に生徒が座っていた。

アレンは入室し空いている席に座ると後ろにいる眼鏡をかけた生徒に挨拶した。

「おはようございます。僕は亜蓮行人です。これからよろしく」

「おはよう。俺は飯田天哉だ。こちらこそよろしく頼む」

眼鏡をかけた生徒、飯田天哉はハキハキとアレンに返した。出身校など簡単な自己紹介をお互いに行っていると、ガラガラツ！ と大きな音を立てながら乱暴にドアを開け、逆立った金髪の生徒が教室に入ってきた。その生徒は自らの席に着くと椅子に座った直後、机の上に足を掛けた。

一部始終を見ていた飯田は立ち上がりアレンとの会話を切り上げた。

「談話中に悪いが彼を注意してくる」

「はい」

その鬼気迫る表情にアレンは一言しか返事をする事ができなかった。

飯田は件の生徒の元へ近づき、憤る感情を隠さずに話しかけた。

「君!! 机に足をかけるな! 雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないか!」

「思わねーよ。テメーどこ中だよ、端役が!」

金髪の生徒は飯田の言葉に聞く耳を持たないどころか逆に煽り始める。くそエリート、ブツ殺し甲斐、などおおよそヒーロー志望とは思えないような言葉を飯田へ投げかけた。

収まる様子を見せない二人の状況に仲裁に入ろうか悩んでいたアレンはふと、ドアの隙間から教室の様子を窺っている人物に気付いた。

同じくその人物の存在に気付いたのか、飯田は金髪の生徒の側を離れドア付近まで移動し自己紹介を始める。

「俺は私立聡明中学出身の……」

「聞いてたよー! あ……っつと僕は緑谷。よろしく、飯田くん……」

聞こえていた、と飯田の自己紹介を遮り緑谷と名乗ったモサモサとした癖毛頭の生徒。どうやら少なからず面識のあった二人はそのま

ま何やら会話を続けていた。その様子に問題がないと判断したアレンは席に座ったまま間も無く来るであろう担任の教師を待つ事にした。

すると、新たにやってきた女子生徒を加え会話に花を咲かせていた緑谷たちを止める者が現れた。黒い髪を無造作に伸ばしている寝袋に身を包まれている男性である。いそいそと教壇まで移動していた。「はい。君たちが静かになるまでに8秒かかりました。まったく合理性に欠けるね」

時間は有限だつてのに、と小言を溢しつつその男性は名乗った。

「担任の相澤消太だ、よろしくね」

自らを担任だと言った相澤の言葉に教室にいた生徒たちは驚愕した、この社会生活不適合者のような風体の男性が高校教師でありプロヒーローでもあるという事実には。相澤はそんな呆気に取られている生徒たちに構わず、寝袋から体操服を取り出して指示を出す。

「早速だがコレに着てグラウンドに集合だ。個性把握テストを行う」「個性把握テストお!？」

担任の教師による突然の指示にいくつもの驚愕の声为重なり響く。

「ええ!?! ガイダンスは? 入学式はどうするんですか?」

「ヒーローになるならそんな悠長な行事出る時間ないよ。……雄英は

『自由』な校風が売り文句。それは『先生側』もまた然りだ」

慌てふためく生徒たちに相澤は淡々と告げた。

「わかつたらさっさと着替えてグラウンド出る」

体操服に着替え終えたA組の生徒20名は全員グラウンドに集まった。

「さて、個性把握テストの概要を説明するが、……単純だ。お前らが小中と義務教育でやってきた体力テスト。その『個性禁止』という制限を解く」

説明しながら先ほど飯田と言いつ争っていた金髪の生徒にボールを渡す。

「爆豪、ソフトボール投げ何メートルだった?」

「……あ? 67m」

「思いつ切りやってみろ。円から出なきや何してもいいから、早よ」
相澤は急かすように爆豪にボールを投げるように促す。爆豪は軽く肩を回しながら円の内側まで歩いていく。円の中で構えた爆豪は掛け声とともに勢いよくボールを投げた。

「そんじやまあ、……死ねええ!!!」

謎の殺意を込められたボールは爆風をまとい遠方へ飛んでいく。相澤は手にしていた計測器によって普通のソフトボール投げでは考えられない記録を生徒らに見せる。

「まず、自分の『最大限』を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

相澤の言葉、爆豪の派手な個性を使った結果、それらに色めき立ち感想を口にする生徒たち。

「なんだこれ!!? すっげー面白そー!!」

「705mってマジかよ!!」

「個性使っていいの!? さすがヒーロー科!」

騒ぎ始めた生徒たちの様子に、おもしろそー……か、と少し落胆したように口を開く。

「ヒーローになる為の三年間、そんな腹づもりで過ごすつもりか?

……よし。トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し除籍処分としよう」

「はあああああ!!?」

「最下位除籍って……そんな初日から、いや初日じゃなくても理不尽過ぎる!」

多くの生徒が驚きを露わにする。先ほど教室で緑谷と会話していた女生徒、麗日は相澤の宣言に異を唱えるが相澤は気にかけない。

「デモンストレーションは終わりだ。始めるぞ。まずは50m走だ」

そして個性把握テストが始まり、生徒はそれぞれ自らの個性を活かしてテストに臨む。

50m走、ある者は脹脛のエンジンでの加速。

立ち幅跳び、ある者掌からの爆破による空中機動。

握力、ある者は複数の腕を合わせた怪力。

反復横跳び、ある者は自らを弾く球体を利用した高速移動。ソフトボール投げ、ある者はボールにかかる重力をゼロにするなど。

どの生徒も何か一つは好記録を残していく中、緑谷は一人焦りを感じていた。

彼は未だ個性を制御出来ていないのである。その個性は『ワンフォーオール』No.1ヒーロー、オールマイトから授かったもの。緑谷は受け取ってからまだ日が経ってない事もあり、使う時は100%の出力でしか発動できない。そして100%で使用すれば彼の身体はその力に耐え切れず、その部位が壊れてしまう。

今回のように何度も立て続けに力を発揮する必要のある事態は避けなければなかった。しかしこれは避ける事の出来ない、乗り越えなければならぬ苦難である。

残り3種目となったところで緑谷はソフトボール投げで個性を使用することにした。

緑谷の個性を使わない様子に不安を抱く飯田。

「緑谷くんはこのままだとマズいぞ……?」

「つたりめーだ。無個性のザコだぞー!」

飯田は当然と結果と言わんばかりの爆豪に対し反論する。

「無個性?! 彼が入試時に何を成したのか知らんのか!」

「はあ?」

会話を打ち切った爆豪だったが、その内容に興味を持ったアレンが飯田に話しかける。

「緑谷は入試の時に何をしたんですか?」

「ああ、彼はな。先ほどの∞女子をOPヴィランから守ったのさ。あの巨体目掛けてジャンプし、そのまま正面から殴り倒したんだ。あれは一瞬の出来事だったぞ」

「……! あれを一撃?! 一瞬で!」

アレンは自らも止めたからこそその衝撃を受けた。アレンの場合は、まず十字架(クロス)を巨大化させあの大きさに対抗した。その上でバランスを崩す事でなんとか動きを止めたのだ。

しかし、緑谷はたった一発のパンチで倒したというのだ。規格外の個性、驚愕の結果である。

アレンが飯田から話しを聞いている間に、緑谷は一投目を投げ終えていたらしく何やら相澤と話している。

「抹消ヒーロー、イレイザーヘッド!!」

緑谷は相澤に向かってヒーロー名を叫ぶ。その叫びを聞いた生徒は様々な反応を見せる。

「イレイザーヘッド? 誰それ?」

「知ってる! アングラ系ヒーローだ!」

メディアへの露出が少ないヒーロー、イレイザーヘッドの存在を知っていた生徒は多くはなかった。

「イレイザーヘッド。相澤先生が……」

「ん? 亜蓮くんはイレイザーヘッドを知っていたのか?」

「名前だけは聞いた事があります。それよりもあの二人いったい何を?」

「そうだな。何を話しているんだろうか?」

アレンと飯田は教師自身の事よりも会話の内容に興味を抱いた。やがて伝えたい事は言い終えたのか相澤は緑谷の元を離れる。

そして、始まる二投目。緑谷は出力調整の出来ない個性を人差し指でのみ発動させる事で、この苦難を乗り越えた。指一つを犠牲にした、その結果は約700mと大記録だった。

爆豪は納得できない事があるのか、緑谷に対して個性を使用して飛びかかるようにする。が、近くに立っていたアレンが咄嗟に十字架(クロス)を発動し身体を掴む事で爆豪を止める。

「ああ!? 離しやがれ、モヤシ野郎!!」

「な!? モヤシ!? 誰がモヤシですか、誰が!! 絶対離しませんよ、突撃するつもりでしょう? 危ないですよ!」

言い争う二人を個性と武器を使い窘める相澤。

「騒ぐなよ、その二人。俺はドライアイなんだから個性使わせんな!」

途端、身動きが取れなくなる爆豪とアレン。爆豪は苛立ちを隠しは

しないもののアレンとともに相澤の言葉を受け大人しくなる。

その後、テストは進み終了する。アレンは立ち幅跳び、握力、ソフトボール投げ、長座体前屈において個性を発動する事で大記録を残した。その他の種目も単純な身体能力で悪くない記録だった。

結果、クラス順位で最下位は緑谷だった。が、生徒らの最大限を引き出すための合理的虚偽、という相澤の言葉により緑谷は除籍を免れた。

緑谷は保健室で治療を終えた後、飯田、麗日と共に下校していた。そんな三人をアレンは後ろから追いかけて声をかける。

「おーい。待ってくださいー！」

「おや、亜蓮くんじゃないか」

アレンの呼びかけに三人は立ち止まり、飯田が返事をする。

「そちらの二人にはまだ自己紹介してなかったですよ。亜蓮行人です」

「ええと、緑谷……出久です」

「麗日お茶子です。よろしくね！ アレンくん！」

「二人ともソフトボール投げが凄かったですよね。緑谷は負傷しつつもかなりの球威を出してましたし、麗日に至っては∞でしたね」

アレンは個性把握テストでの結果について相手を褒める。それは友好的に接するためのお世辞ではなく、純粋な賞賛による言葉だった。続けて心配そうな表情で確認する。

「指はもう大丈夫ですか、緑谷？」

「うん。保健室でリハビリがールに治してもらったから、もう平気だよ」

「それは良かった」

四人は会話をしながら駅まで一緒に歩いていく。

彼らのヒーローアカデミア、その始まりの一日は友情を育んで締められた。

コスチュームのデザインを決めたのも……

雄英高校1年A組で個性把握テストが実施された翌日のこと。A組では午前の通常授業を終えて、昼休みの後ヒーロー基礎学が始まった。

「わーたーしーがー!! 普通にドアから来た!!」

授業開始時に教室へNo. 1ヒーロー、オールマイトが入ってきた。登場しただけで生徒たちは沸き立つ。

「オールマイト……!! すっげえ。ホントに先生やってたんだ!!」

「銀時代のコスチューム……!! 画風が違い過ぎて鳥肌が……!!」

「確かに。繰り返し休載し、掲載雑誌が変更になった漫画の現在と初期くらい画風が違いますね……」

アレンもぼそりと呟く。生徒たちの反応を受けてオールマイトは授業についての説明を始める。

「ヒーロー基礎学!! ヒーローの素地をつくる為、様々な訓練を行う課目だ! 因みに単位数も最も多いぞ! 早速だが今日は戦闘訓練だ!! そしてそいつに伴って、こちら……!!」

そこまで説明したオールマイトは手元のリモコンを操作し教室の壁の一部を動かす。するとそこから番号の貼られたケースが現れる。オールマイトはそのまま説明を続ける。

「入学前に送ってもらった『個性届け』と『要望』に沿ってあつらえた……」

「コスチューム戦闘服! おおお!!」

「コスチューム戦闘服というヒーローならではの物を自分も所持するのだという事実に興奮を隠せない生徒たち。

「着替えたら順次グラウンドβに集まるんだ!」

「はいっ!!」

オールマイトの指示に生徒たちは声を揃えて返事をする。

そして、A組の生徒が全員着替えてグラウンドに集合した。そんな生徒たちをオールマイトが褒める。

「うんうん、いいじゃないか！ 格好いいぞ!!」

アレンの戦闘服は全身に銀の装飾がされていて左胸に十字架が入った黒地のコート。アレンを見て声をかける生徒がいた。赤い髪色をした尖った歯を持つ男子生徒、切島鋭児郎と金髪で軽薄そうな雰囲気男子生徒、上鳴電気の二人である。

「おお、おめーのそれ。すごい凝ったデザインだな!」

「だよな。動きづらくね?」

「ええ、まあ。デザインは諸事情で決められてしまって。確かに少し動きづらいですけど、機動性より防御性能を重視なので仕方ないんです。……説明が始まりますよ」

アレンは授業中という事もあり、会話を途中で切り上げる。

「ー今回行うのは、屋内での対人戦闘訓練さ!」

オールマイトの説明した訓練の内容は、『敵』がアジトに『核兵器』を隠しそれを『ヒーロー』が処理するという状況設定で、生徒が『ヒーロー役』と『敵役』に分かれ2vs2の屋内戦をするというもの。

『ヒーロー役』の勝利条件は、制限時間内に『敵役』を捕まえるか『核兵器』を回収する事。

『敵役』の勝利条件は、制限時間まで『核兵器』を守るか『ヒーロー役』を捕まえる事。

くじによって各組み合わせが決定し、『ヒーロー』Aチーム緑谷&麗日vs『敵』Dチーム爆豪&飯田の初戦が始まった。その内容は終始Dチームが優勢だったが逆転を決めAチームが勝利した。負傷した緑谷を除いた生徒たちの講評も終えた。

そして続く第二戦。『ヒーロー』Iチーム尾白&障子vs『敵』Pチーム亜蓮&瀬呂の訓練が始まろうとしていた。

痩せ気味で黒髪の生徒、瀬呂範太と痩せ気味で白髪の生徒、アレンが話し合っている。

「お互いの個性について確認しましょうか、瀬呂」

「おう。見ての通り俺の個性はこの両腕だ。肘からテープが出せる。もちろん切り離しても使えるから罨も作れるぜ! 確か亜蓮の個性も腕だったよな」

「はい。左腕を鉤爪状に変える事ができます。大きさや長さを変えたり遠距離攻撃も可能ですが、屋内戦闘だと使いづらいですね」

お互いの個性について情報交換したアレンと瀬呂はそのまま作戦会議を続ける。

「次に相手チームの二人について何か知ってる事はありますか？」

「んー、そうだなあ……。一人は見たまんま『尻尾』だよな。それで、タコみたいな奴！ あいつやばいぞ、昨日のテストで握力500キロくらいあったぜ！」

「だとすると、彼の個性は怪力の複腕ですかね……」

「そんなところじゃねーか？ そんなでどうする？ 『ヒーロー』捕まえるか、制限時間まで『核』守るか」

「それは、……」

そして第二戦の開始時間を迎えた。『ヒーロー役』の細目で大きな尻尾を生やした生徒、尾白と、口元をマスクで隠し両肩から膜のある二対の触手を生やした長身の生徒、障子は建物の入口にいた。

障子目蔵の個性は『複製腕』である。これはアレンたちの予想していたものを超えた性能を誇る。それはただの怪力ではなく身体の各部位を触手の先端に複製する事ができる。さらに複製した部位は機能が強化されるのである。耳なら聴力、目なら視力といったように。即ち障子は個性による優れた索敵能力を持つのである。

入口に立つ障子は、その個性を使用して建物内部の様子を探っていた。

『敵』チームの二人はどうしてる？」

「二人は四階の広間の周囲を……時折止まっているが、基本的に移動し続けている。もう一人は……二階のフロア……を移動中だな」

尾白に対戦相手の状況について聞かれた障子は手に入れた情報を伝える。

「むこうが二手に分かれてるなら、作戦通り真っ直ぐ『核』を目指そう。広間の周りを移動してるならそこにあるんじゃないかな」

「……そうだな。一階にいる奴は避けて行動しよう。おそらく四階いるのはテープの奴だ。移動し続けているのは周囲に罠を仕掛けてい

るのだろうか」

「よしっ。それじゃあ行こうか」

行動指針を決めた二人は建物に入る。常に障子が個性を使用し索敵する事で全く会敵せずに二階へ三階へと建物を上っていく。

そして四階に着き、窓のある通路を進んでいく。五個目の窓に差し掛かった所で『ヒーロー』チームはどうとう一度も戦闘を行う事なく、『核兵器』があると想定していた広間に繋がる通路まで辿り着いた。そこで待機していた瀬呂は通路の反対側に現れた二人を見て驚く。

「……おいおい、マジかよ。亜蓮、何やってんだよ！ 四階まで来ちゃってんぞ！ 今どこだよ？ はああ！ 一階イ！！ 速く来いよ、ヤバいだろ！！ ーは？ 迷ったあ！？ なんて見取り図持ってんのに、迷うんだよ！！ バカか！！」

瀬呂は通信機で亜蓮と連絡を取りつつ、いつでも個性が使えるように構えを取る。そんな瀬呂と相對している二人のうち、尾白は苦笑いを浮かべながら腕を胸の前に構え戦闘態勢に入る。一方、障子は先端に耳を複製している触手を拡げる。

「……尾白。どうやら、本当にもう一人は一階にいるぞ……」

「……了解。方向音痴なのか……？ まあいいさ。一階にいるんなら走っても5, 6分はかかる。だったら、今のうちに『核』のところまで急ごう」

索敵を終えた障子も複製していた耳を消して戦闘態勢に入った。会話を聞いた瀬呂は再び驚く。そして同時に納得した。

「え？ その個性、耳とかも出せんのか！？ ……それで亜蓮の場所がわかるのか。今みたいに腕しかないのかと思ひ込んでたぜ……」

「考えが甘かったな」

「……はあ。二対一とか不利すぎるだろ、勝てねーよ」

瀬呂が言葉を言い終えたと同時に尾白が走り出し接近を図る。『尻尾』というシンプルな個性しか持たない尾白だが、それ故に同世代の人間と比べ身体を鍛えている。そんな尾白は当然走るのも速い。ただ一直線に瀬呂の元まで行くだけなら数秒で事足りるだろう。しかし、三步目を出した瞬間、急ブレーキを掛け横に倒れこんだ。尾白の

身体があつた場所を一本のテープが通り過ぎていく。テープは開けられた窓のすぐ横に貼り付いた。

「……まあ、負けるつもりもないけどな!!」

瀬呂は先ほどまでとは打って変わって自信に満ちた表情で断言した。瀬呂の個性はこの状況において有利に働くからだ。

彼の個性『テープ』は両肘部からテープ状の物体を射出することができる。つまり中距離攻撃が可能となる。決して広いとは言えない通路での戦闘において一定の距離を保ったまま攻撃ができるというのは大きなアドバンテージになる。今回、瀬呂の対戦相手が近接格闘しか出来なかつたのは幸運と言える。

さらには、決して広くはない通路という環境での戦闘であるのも大きい。人数差が有利になるのは相手を囲む事が可能な場合である。この場面のように、瀬呂から見ても一方にしかないのでは、たとえ人数で優つていてもそれを活かす事はできない。

もちろん一人を盾、犠牲にすれば突破することは容易ではある、だが尾白と障子がお互いを信頼した行動を即座に選ぶには、知り合つてからの時間が短過ぎた。

『ヒーロー』と『敵』がいる通路に風が通り抜ける。

「さあ、どうする? ……拘束されるの覚悟で突っ込んで来るか? それとも『敵』に背を向けて逃げるか?」

瀬呂は立ち止まっている『ヒーロー』に向かってあからさまな挑発した。言葉だけは立派だが、少し声が震えていた。何かを恐れているような雰囲気になっている。

「おそらく奴は強行突破されるのを恐れている。今の挑発も時間稼ぎの為のものだろう。あちらは合流するのにまだ時間が掛かるだろうからな。……それに拘束されるかも知れないがそれは一人だ」

「うん。なら俺が行くよ。ここまでは障子のおかげで来れたからさ、俺だって活躍しないとな」

「……いや、俺が盾になる。尾白は『核』のところまで急いでくれ」

視線だけは瀬呂から逸らさずに会話していた二人は改めて身体を前方に向ける。

「おっと、相談は終わったか『ヒーロー』ども！」

瀬呂は演技に熱がこもり始めていた。

それに対して障子は口を開く。

「ああ。『ヒーロー』らしく立ち向かってやるぞ！」

そう言い終わると同時に障子と尾白は走り出した。先ほどのようにテープが射出されるが、障子が盾となった上で触手などにわざと当てることで足を止めないようにしていた。

障子は瀬呂の元に辿り着くまでの僅か数秒でまともな戦闘は行えないほどテープでぐるぐる巻きにされていた。

しかしその甲斐あって、尾白は全くテープに当たることなく瀬呂に接近した。

尾白は障子の大きな身体の陰から飛び出し、瀬呂を抑え込む。

「障子の犠牲は無駄にしない！」

「いえ、これでチェックメイトです」

尾白は後方から聞こえてきた声に思わず振り返る。

「クロス・グレイヴ
十字架ノ墓」

眼前に迫っていた銀色の物体を身体に叩き込まれ壁まで吹っ飛ばす。
尾白。

「……手加減はしたんですけど、大丈夫ですか？」

「……ああ、なんとか」

窓から駆け足で近づいたアレンは倒れている尾白に確保テープを巻き付けつつ声をかけた。同時に瀬呂も確保テープを障子に巻き付けていた。

「敵チームWIIIIIN!!!」

スピーカーからオールマイトの音が鳴り響いた。

「それじゃあ四人とも、モニタールームまで戻ってきてくれ。講評を行おうぞ」

そしてアレン、尾白、障子、瀬呂の四人がモニタールームまで戻り講評が始まる。

「ーさて、これから講評を始めるわけだが、尾白少年と障子少年に確認だ。最後に亜蓮少年の不意打ちにより訓練は終了した事に疑問が

あるんじゃないか？」

オールマイトは『ヒーロー』チームの二人に対して質問する。その問いに尾白が答えた。

「二階にいたはずの亜蓮がどうやってあの短時間で四階まで来れたのか、わかりません。一階にいた事は、障子も確認していたので間違いないはずですけど」

納得ができないといった様子の尾白。

隣にいる障子も同じような事を考えていた。自らの個性により一階にいる亜蓮の存在を把握していた。それ故にあの場面に亜蓮が間に合った事が理解できなかった。

「亜蓮少年は建物の外壁を登って移動して窓から入ったのさ！少年は階下へ移動する時、いくつかの窓を開けていたんだよ。瀬呂少年から通信を受けた亜蓮少年は一階の窓から個性を発動させ一気に四階まで移動したんだ。この際、瀬呂少年は挑発する事で注意を自分に引きつけていたね、ファインプレーだったぜ！あそこで後ろを向かれていたらバレる可能性が高かったからな」

モニターから見ていたオールマイトと生徒らは、アレンが壁伝いに移動していたことが一目瞭然だった。

あの時、アレンは窓から身を乗り出し個性を発動させ左腕を伸ばした。そして爪を屋上の縁に引つ掛けた状態で徐々に左腕を短くする。そうした動作で四階まで移動していたのだ。

「それじゃあ、具体的な講評に入るぞ！まずは『ヒーロー』チームからだ。尾白少年は概ね正しい行動が取れていたな。重箱の隅をつつくようだが、瀬呂少年に最初に駆け出した時にもう少し思い切りが良ければ、それで相手を抑え込めたかも知れない点は惜しかったな」

「はい。ありがとうございます」

尾白は思いの外、高評価を貰えた事に驚きつつ感謝を伝える。

「次に障子少年だ。今回の君の失敗は、亜蓮少年が一階にいるとわかった時点で個性を解いた事だな。君の強みである索敵能力は敵地にいる限りできるだけ使用し続けるのがベストだ。もちろん、四階まで会敵しなかったのは素晴らしかったぜ！」

「はい。……精進します」

オールマイトの助言を聞き受け容れる障子。

「そして『敵』チームだ。瀬呂少年、君は個性をよく活かしていた。自分と相手の出来る事を理解した立ち回りはグッドだ！今回のMVPは君だぜ、瀬呂少年！」

「よっしやー！ ありがとうございますっ、オールマイト！」

瀬呂はオールマイトからの賞賛に飛び上がり、ガッツポーズを取り、全身で喜びを表現する。

「最後に亜蓮少年。建物の外側を通るというトリッキーな手段で不意打ちを成功させ見事、勝利を掴み取った。しかし市街地で屋内に隠れていた敵がとるにしては少々派手な行動だったな。あと、これは瀬呂少年にも言える事だが相手の個性への警戒が薄かったぞ。今後は気をつけろよ！」

「わかりました。反省します」

少々厳しいオールマイトの意見もアレンは素直に聞き入れた。

オールマイトは見学していた生徒らの方を向き話し始める。

「よし、講評も終えた事だし次の組！ 行くぞ!!」

「はい!!」

オールマイトの声に気合い充分な生徒ら。

こうして屋内対人戦闘訓練は授業が終了するまで続いた。

そして時は放課後。

A組の多くの生徒たちは教室に残りヒーロー基礎学の授業であった事に会話を弾ませていた。

「それにしても、今日のヒーロー基礎学良かったよな！ これぞヒーロー科って感じでさ!!」

「うんうん。相澤先生の時よりもずっと優しい雰囲気だったよね！」

「オールマイト、教師を勤めるのは今年が初めてですからね。探り探りで行っているのかも知れないですね」

切島と紫に近いピンクの肌をした黒目がちで頭に二つの触角を持った女子生徒、芦戸三奈そしてアレンの三人が話している。

「やっば、最初の緑谷と爆豪の戦闘はアツかったよな！」

「動きがすごかったよね！ 最初の攻撃避けたやつ！バツて避けた、バツて!!」

「二人は幼馴染らしいので、お互いの事を知っている上での攻防があっただけでしょうね」

そこに包帯を巻いた緑谷が教室に入ってきた。

そんな緑谷に駆け寄り自己紹介を始める生徒ら。既に緑谷と自己紹介を済ませていたアレンは他の生徒に近づいた。

「尾白……でしたよね、僕はアレンです。先ほどの攻撃で怪我はしませんでしたか？」

「ああ。平気だったよ。あの時、不意打ちを当てる前に声を掛けたのは俺に受け身を取る余裕を与える為だったんじゃないか？」

そんな言葉にアレンは少し困ったように表情を変えて答える。

「……それは、買い被りですよ。瀬呂が先に捕まりそうだったので声を出して動きを止めたかったんです」

「あともう一つ。道に迷ったってのは本当だったのか、それともこちらを油断させる為の嘘だったのか、どっちだ？」

その質問にアレンははつきりとした笑顔を浮かべて返答した。

「ノーコメントで」

委員長決めと自主トレと救助訓練

A組初めてのヒーロー基礎学があった次の日のHRの時間。爆豪と緑谷に戦闘訓練での事について相澤から一言注意があった後、本題であるクラス委員長を決める事になった。飯田の案により多数決が行われた結果、緑谷が委員長、八百万が副委員長に選ばれた。

しかし、昼休みに事件が起こった。雄英高校が誇るセキュリティ、通称雄英バリアを突破されマスコミが校内に侵入される事態が発生した。この事態に食堂では生徒の迅速な避難によるパニックが巻き起こっていた。この状況は飯田が機転を利かせた事で落ち着かせた。その活躍がクラスメイトに認められ、委員長の肩書きと非常口という渾名が与えられ一日が終わった。

そして翌日早朝、ドクヒーロー事務所のトレーニングホール。アレンが黒いくせ毛の少年に組み伏せられていた。

その状態のアレンは、自分の関節を極めている少年にタップして負けを認めた。

「――降参です、弾。これで7対2……やっぱり中々勝てませんね」「おう」

アレンに勝った少年の名前は伸張弾。アレンと同じく孤児院に暮らしている子どもの一人である。

降参を聞いた弾はアレンから離れる。弾の表情は勝利を収めた人間には見えない不満げなものだった。そんな様子を不思議に思ったのか質問するアレン。

「どうかしたんですか？」

「いやさ、……ハンデ貰って勝ち越しても当然っつーか面白くねえなあと思って」

早朝に行われるアレンと弾の自主トレ。監督者がその場に行かない事もあり、毒島からはアレンの『十字架』の発動禁止を言い渡されていた。その一方で弾の個性『ゴム』は常時発動の異形型。それ自体が殺傷能力を持つものではないので制限が掛けられなかった。

『ゴム』という個性により衝撃をほぼ無効にする身体を持つ弾にとって近接格闘は得意分野である。

弾にとつて一方的に優位な条件での格闘訓練は好ましいものではなかった。

そんな言葉を聞いたアレンは笑顔で返す。

「そんな台詞は全勝してから言ってくださいね。ハンデがあっても、二回は負けてるじゃないですか。油断してる証拠」
「うぐっ！」

「僕が言える立場じゃないですけど……ヒーローならどんな不利な条件でも勝ちを拾わなきゃいけない。だったら有利な条件で負けるのは論外でしょう。それに——」

「……最後の一戦始めようぜ」

話を途中で遮り、弾は訓練の続きを促す。アレンは、やれやれ子どもだなあ、と呟きながら弾から距離をとり構える。

「それじゃあ再開しましょうか」

アレンがそう、言い終えた瞬間。弾はアレンから三メートルほど離れているにも関わらず、その場で回し蹴りを放つ。常人であれば届く事はないが、弾の繰り出した脚は個性により長く伸び、ムチのようなしなりを持つ攻撃となつてアレンの腰部目掛けて放たれた。

アレンの言葉に苛立ちを覚えた弾は速攻で終わらせようと強力な一撃を誇る回し蹴りを放つ事に決めた。

アレンは迫ってくる蹴りに構うことなく前方に全力で駆け出し弾へと接近する。

回し蹴りをしている弾の身体を支えているのは左脚のみ。弾はそんな不安定な体勢でアレンを懐まで近づかせた事に動揺し対応が一手遅れた。

既に動きが遅くなつていた弾の右の太腿を左手で下から力を込める事で蹴りの軌道を上にずらした。

自分の想定外の動きをさせられた弾はバランスを崩す。アレンはその隙を見逃さず、弾の左脚の裏側に脚を掛け右腕で肩を押さえ込み床に倒した。

「抵抗しますか？」

アレンが問う。

「無理……。……参りましたー。ちくしょう」

悔しきで顔を歪ませながら弾は降参を宣言した。降参を受けアレンは起き上がり伸張に手を差し伸べる。

「今日は終わりですね。戻りましょうか、朝食の準備も終わってるでしょうし」

「……………」

アレンの手を取り立ち上がった弾は黙ったまま孤児院へ足を進める。

「ああと、9戦目の後に言ったことなら気にしないでください」

「ん？」

「嘘は言っていないですけど挑発の意味もありましたから」

「そうか……………」

並んで歩く二人は先ほどの訓練について話し合う。

「打撃による攻撃が決定打にならない弾を相手にする時は勝つ方法に限られる。なので最後は弾の体勢が不安定になる回し蹴りを使わせようと考えました」

アレンは挑発する事で一撃で勝負を決められる攻撃を、距離をとる事で中遠距離攻撃を、させるように思考を誘導した。その結果は回し蹴り、強力だが片足立ちで脚の長さを伸ばす必要のある分隙の大きい蹴りに繋がった。

そこまでの説明を聞いた弾はアレンに確認する。

「そんな簡単に相手の考えを狙い通りに変えられんのか？」

「いえ、普通は上手くいきませんよ。今回は『僕が弾の性格を知っている』『弾が素直な性格だった』『直前に数回の戦闘を交えていた』ここまで揃って漸く僕は誘導できました」

師匠ならもつとスマートなんでしようけどね、と続ける。

「ん？ さっきのやつ、俺バカにされてた？」

「そんな事ないですよ、むしろ良い性格だと褒めましたよ」

「そっか。ならいいや」

とても素直な男、伸張弾だった。そうして訓練の反省をしていた二人だったが、唐突にアレンが話題を変える。

「そういえば、弾との早朝訓練もそろそろ潮時ですかね」

「なんで止めるんだよ？　ずっと続けようぜ」

弾の返答にアレンは溜め息を吐く。

「僕は構いませんが、弾は受験生でしょう。雄英志望なら実技は十分なんですから勉強しなさい、勉強を」

「ああ。勉強……めんどくせー」

しかめっ面の伸張に呆れるアレン。

「たまになら気分転換として組み手に付き合いますよ」

「一日三回、頼む」

多い、と弾の頭をアレンは軽くはたく。

そうこう話しているうちに孤児院に到着する二人。入口には玻璃硝子が立っていた。

「お疲れ様。朝ご飯はもうすぐできるけれど、先にシャワー浴びて来てね。食事中に汗臭いのは嫌なもの」

「へーい」

「それ言うためにここで待ってたんですか……？」

返事を返しそのまま浴室へ歩きだす弾と疑問に抱き問いかけるアレン。

「弾、ちょっと待って。戻ってきて。そう、ありがとう。……もちろん他にも用があるわ。これにサインしてほしいの」

硝子は紙とペンを弾とアレンに手渡す。

「これは？　契約書……ですか？」

「そこまで仰々しいものじゃないわ。このホームページに写真とか動画載せる時に顔が映る事の同意書よ。二人とも別にいいでしょ？」

「いいよ。じゃあシャワー浴びてくる」

即答した弾は自分の名前をサインして、今度こそ浴室に行く。

「僕もいいですけど……」

「ありがとう。動画はもう出来てるからあとはアップロードだけだったの」

そう言い残し立ち去る硝子。アレンはなにも言う事はなくシャワーを浴びに移動した。

アレンと弾がシャワーで汗を洗い流し、硝子が自室で作業を終えた後、孤児院の朝食の時間。

5人の子供たちと孤児院担当職員の1人の大人と一緒に朝食を食べていた。食事中にその場にいるただ1人の大人――瀬和八姫が話します。

「二つ、お知らせがあります。まず一つ目、もう皆んな聞いてると思うけど今日から『ドクヒーロー事務所』のホームページに孤児院の写真と動画が載ります」

「おれたちニュースにでるのか！ 有名人だ！」

「チメードが上がってしまうのね。大変だわ！」

途端にはしやぎ出す獅郎と兎季子。瀬和はそんな年少コンビを窘めるように話を続ける。

「残念ながら、そこまで有名にはなりません。というかニュースは別物よ。あくまで施設の紹介に写真や動画を載せるの。あなたたちは基本的に少し映り込むかもってくらいね」

瀬和の否定をそーなのか、と特に気にするでもなく獅郎と兎季子は受け容れる。

「重要なのはこつちのお知らせよ。よく聞いてね。少し前に中学生の行方不明事件がありました。痕跡が全く見つからない事から家出じゃなくて誘拐の疑いが出てきたらしいの。しばらく獅郎さんと兎季子ちゃんは私と、硝子ちゃんは弾と一緒に登下校すること、いい？」

「いいぜ！」

「わかったわわ！」

「りよーかい」

「わかりました」

子どもたちは口々に返事をする。一人、名前を呼ばれなかったアレンは確認の意味を込めて質問した。

「僕はいいんですか？」

「行人くんと弾くんは毒島さんの弟子だもの。逃げたり避けたり守つ

たりは得意でしょ？ 信用してるわ。きつと大丈夫よ。」

「……………」

そんな会話とともに孤児院の朝食は終わった。

そして、時間は経過しアレンが登校して教室に着いた頃。アレンが席に座って1限目の準備をしていると、突然ドアが開き教室に1人の生徒が飛び込んで来た。その生徒はそのままアレンに近づいた。

「亜蓮くん!! えっと……………ちよつと聞いてもいいかな!! コレの事なんだけど!」

テンションの高いその生徒、緑谷は自分のスマホを指してアレンに聞いたのだした。

「……………ええと……………何ですか?」

「あ。……………ごめん。そこでコレ見てびっくりしちゃって。ここにいるの亜蓮くんであってる?」

緑谷が見たのは『ドクヒーロー事務所』のホームページに載せられた1枚の画像。その画像にはプロヒーロー『ドク』と1人の少年が一緒に映っていた。その少年は赤黒い左腕に白い頭、つまりは亜蓮行人だった。

「……………確かに、これは僕ですね」

「やっぱり!! 亜蓮くんはドクと会った事があるんだね! プロヒーロー『ドク』! 個性『毒薬』の生成は体内体外どちらでも可能。わざと毒を摂取したりウィルスに感染する事で特効薬や抗体も自由に作れる。ヒーローの他にも孤児院の経営、医者をやっている当然医療行為もできるけどどちらかといえば、個性柄薬剤師としての活動が多い。そしてヒーローになる前は当時存在していなかった特効薬を生成するという素晴らしい功績を持つ。新薬の生成を出来る限り行わない理由として「一人の人間の個性に頼りきりになってしまったら、技術の進歩が遅れる事に繋がるかも知れないから」と雑誌のインタビューで答えていたり。他にも——」

「ちよ、ちよつとストップ!」

ブツブツ……………とドクに関する情報を語り続ける緑谷だったが、アレンによって止められる。

「ご、ごめん。ええと……それで聞きたかったのは、なんでヒーロー活動時にしか姿を見せないドクと一緒の写真に写ってたのだったのかって事なんだ」

「僕がその孤児院に住んでいるからですよ。でもその事に負い目は感じていないので自然に接してくれると嬉しいですね」

質問した事を後悔した様子になった緑谷に、笑顔で話しかける。

「そうなんだ……。うん。教えてくれてありがとう。——ドクについて色々聞いてもいいかな？」

「もちろんいいですよ。……すごく詳しくかったですけど師匠のファンなんですか？」

「うん、ドクのファンっていうよりヒーロー全般のだけだね。特に好きなのはオールマイ……。え？　今、師匠って言った!？」

アレンの発言に今日一番の大声が出た緑谷。周囲にいるクラスメイトの視線が集まるが、そんな事は御構い無しにアレンに問い掛ける。

「はい。初めてこの十字架左腕を発動させた時に暴走させちゃって、それ以来制御の為に鍛えてもらってます」

「暴走して……。制御……。そんな経緯があったのか……」

緑谷は反芻しながら思索する。

「そういえば、緑谷は個性を使ったあと怪我してましたね。僕も暴走した時は左腕がボロボロになりますよ」

「ん？　『なりますよ』ってことは今も？」

アレンの言葉に違和感を覚えた緑谷は聞き返す。

「はい。全力で十字架を使うと制御しきれずに暴走しちゃうんですよ」

「できたら、制御にどんな特訓したのか——」

「お早う。席に着け」

挨拶とともに相澤が教室のドアを開ける。

「——また後で質問いいかな？」

「ええ。長く話せる昼休みか放課後にしましょう」

そしてヒーロー基礎学の時間。救助訓練を行う為にA組の生徒は

バスに乗り訓練場へ移動していた。

バスの中では、どんぐり眼の蛙のような風貌の女子生徒の蛙吹梅雨の発言がきっかけで個性について議論が始まった。

緑谷の個性はオールマイイトに似ている、似ていない、ヒーローとして人気ができるのはどんな個性か、派手な個性といえど誰だ、など。

「轟とか爆豪の個性は強いし派手だよな！あと亜蓮と常闇のもカツケー！」

切島のクラスメイトに対する評価を聞き蛙吹は言葉を返す。

「亜蓮ちゃんの個性は変わってるわ。左腕だけの個性なんて珍しいもの。特に目立つんじゃないかしら。でも爆豪ちゃんはすぐキレるから人気でなそう」

「確かにな。この付き合いの浅さでもクソを下水で煮込んだ性格だつて認識されるんだから、マジやべーよ」

「んだと、てめーのボキャブラリーはなんだコラ!! 殺すぞ!!」

そんな会話で車内は騒がしくなるが――

「もう着くぞ。いい加減にしとけよ」

「はいっ！」

相澤の注意で大人しくなる。

そして今回の訓練場、嘘の事故や災害ルームに到着した。

そこで待っていたスペースヒーロー『13号』から個性の危険性、それを救命の為に使う授業の要点を聞く生徒たち。ヒーローとしての心得を教師から説かれたことで、授業への意欲が高まっていた。

相澤が授業内容について説明しようとしたその時。

「おい……オールマイイトいなのかよ。……はあ」

未熟な生徒が相対するには早過ぎる、途方もない悪意が現れた。

「……子どもを殺せば来るのかな？」

後に起こる大事件の始まり 救助訓練改め敵連合USJ襲撃事件

「ここに飛ばされてくるなんて運がなかったな。てめーらはここで死ぬ」

ヴィランに襲撃され、そのうちの1人の個性『ワープゲート』により生徒はUSJ内の各エリアに散り散りに飛ばされた。

その結果、台風などの悪天候による自然災害時の訓練の為のエリア、暴風・大雨ゾーンでアレンと常闇は数人のヴィランに囲まれている。二人の生徒は幾多ものヴィランの眼と雨風に晒されながらも平静を保っていた。

「さて、常闇はどうしますか？ この人たちと戦うか、逃げるか。他のクラスメイトを探しに移動するか、先生との合流を目指すか」

「この空間なら俺の黒影^{ダークシャドウ}は十全にその力を発揮できる。先生との合流を優先するが相対したヴィランは他の者の障害になる前に倒すつもりだ」

「なるほど……概ね賛成です——」

行動方針を確認された常闇はアレンに自身の考えを伝え、話し合う。会話中もヴィランたちから目を離す事はしない。

「——がその前に、少し」

「何をやる気だ？」

アレンは常闇に答える事なく一歩、足を前に踏み出す。

「なんだ？ もう相談は終わったのか。遺言くらいなら聞いてやるぜ？」

ニヤニヤと嘲るようなヴィランたちだが、何故アレンたちの会話中に攻撃を仕掛けなかったのか。それはアレンが十字架^{クロス}を発動させ牽制していたからに他ならない。しかし警戒しつつも、相手が高校生になっただけの子どもと侮っているのか、余裕の笑みは崩さない。

そこでアレンは口を開く。

「あなた達は、まだここに侵入しただけです。罪を重ねる前に投降す

るつもりはありませんか?」

「おいおい。何言ってるだよ、バカなのか? てめーら殺してそれで終——」

最後まで聞かずにアレンは左腕をかかげ、そのまま下ろす。

「クロス・グレイヴ
十字架ノ墓」

誰もいない場所に十字架ククロスを叩きつける。制御可能限界ギリギリで放たれたアレンの技は、道路を破りコンクリートのその下にある土までも抉り出した。その勢いで土砂が立ち上るが雨と強風によりたちまち流される。アレンの一撃を、その威力を見せつけられるヴィランたち。

「ご覧の通り軽く振っても、これです。僕の個性は殺傷性がとても高い。なので大怪我したくなかったら投降してください」

80%の力で十字架を使用した事に感情が高ぶるもそれは内心に隠し、アレンは涼しい顔で嘘を交えて言い放った。

「ハッ。そんなんでオレたち全員倒せるとでも思ってるのか!」

「いくらなんでも考えが甘いんじゃないか? ヒーロー志望のお子様がお?」

アレンと常闇を囲んでいるヴィランたちは結局、唯の1人として降伏する者はいなかった。

それはアレンの見せた十字架ククロス・グレイヴノ墓を使われても問題ない事を意味している。人数差の有利を疑っていないのか。若しくは——

「常闇、気を付けてください。降伏しないという事はさっきの攻撃を凌ぐ方法があると見て——……」

「何も考えてない愚者の可能性もある」

——そもそも降伏という行為を選択肢に入れてない場合である。複数の手を顔や腕など体中に付けている青年、死柄木弔が率いる敵連合は主犯格を除き、質より量を重視して集められた雑兵。もしこの段階で降伏を選ぶような人間であれば、この場に来る事はなかっただろう。

ヴィランたちの戦闘態勢を解かない姿にアレンは覚悟を決める。

「わかりました。僕は説得を諦めます。なのでそちらも多少の怪我は

諦めてください」

「警告はした。応えないのならば暫し眠っててもらおう」

アレンは発動中の十字架クロスを周囲のヴィランを威圧するように構える。常闇も個性を発動させ黒影ダークシャドウを出現させる。

「同時に仕掛けんぞ!!」「行くぞ!!」「おらああ!!」「やつちまええ!!」「死ねや!!」

ヴィランたちは掛け声とともに、各々の個性を発動させ一斉に襲いかかる。

十字架ノ墓クロス・グレイヴ!

薙ぎ払え、黒影!ダークシャドウ

アレンは左腕を右から左へ振り払う事で、常闇は黒影ダークシャドウによる攻撃でヴィランたちを吹き飛ばす。直撃したヴィランはその勢いで後ろで控えていたヴィラン諸共近くの建物に叩きつけられ意識を失う。

「……あつけないですね。あの自信は何だったんでしょう」

「数による優位性が己の実力を過信していたのだろう。……ここは片づけたが、下手な連携は互いの邪魔になりかねん。二手に別れるか、巫蓮?」

「いえ、目的地は同じですから一緒に行きましょう。戦うときは背中合わせでそれぞれ前方の敵にだけ集中する、とりあえずそうしませんか?」

「……いいだろう。この背中、お前に託すぞ。移動中は俺の黒影ダークシャドウが後方を見張る」

それからアレンと常闇は暴風・大雨ゾーンから出て相澤のところに行くために出口へ向かった。その道中、何度か2, 3人のヴィランと数回遭遇したがどれも十字架クロスか黒影ダークシャドウの一撃で迎撃できる程度でしかなかった。連携が云々と話し合っていたのがまるで無意味なほどだった。

「……妙ですね。『オールマイトを殺す』なんて大それた事企んでる割に大して実力もない……」

「俺たち生徒を抑えるための数合わせと言ったところだろうな。おそらく本命は別にいるはずだ」

「だとすると、急いで合流した方がいいですね」

改めて結論を出した二人は足を速め、暴風・大雨ゾーンを後にする。

そして、目的地であるUSJの入口付近に辿り着いた。二人はそこで悍ましい光景を目にする。脳を露出させている改造人間——脳無が相澤を俯せに組み伏せていた。相澤の腕は皮膚が崩れている上に完全に骨ごと折られ、顔には地面に叩きつけられた様な傷を負い血を流している。

あまりの衝撃的な光景に言葉を失っていた常闇は、ふと隣にいるアレンに目を向けた。

同じく黙っていたアレンだが、そこにある感情は驚愕や恐怖ではなく純粹な——

「……何……してんだよ……!!」

怒り。アレンはその感情に身を任せ思考を放棄した。駆け出して接近しながら左腕^{ククロス}を巨大化させ二人のヴィラン目掛けて全力で叩きつけた。十字架^{ククロス}は普段の発動状態とは異なり、淡いライトグリーンの光を纏っていた。その途轍もない威力に砂埃が立ち込める。もし仮にアレンが冷静であったならば相澤にも危険が及ぶこのような行動は取らなかつただろう。それほどまでに今のアレンは冷静さに欠けていた。

アレンの突然の攻撃に驚く常闇。

「いきなり何を……！ 先生は！」

「……いや、効いてない」

瞬時に死柄木の前へ移動した脳無が片手で受け止めていた。その驚愕の結果により、皮肉にもアレンは少し落ち着きを取り戻した。

「おいおい。いきなり攻撃仕掛けてくるなんて、物騒だろ。これだからヒーローは……。自分たちの暴力は正当化するんだ」

呆れたような口調で語りかける死柄木弔。顔を覆っている指の間からは嘲るように歪めた眼が覗いている。

「脳無にそんなのは効かないんだよ。なんせショック吸収を備えた対オールマイイト用の怪人だ」

そこで一度口を閉じ、一瞬思案した様子の死柄木。眼には狂気が映り込んでいる。そして、

「そうだ。そのオールマイトがないんだ。自分の不在が生徒の死を招いたと知ったら、どんな顔をするんだろうな？　脳無、そのガキ消せ」

死柄木の命令とともに、脳無が跳ぶ。瞬時にアレンの前に移動しその勢いのままに右の拳を振るう。アレンの後方にいた常闇は余波を受けて後ずさる。

「そうそう。ガキは黙って殺されてれば……、あ？」

死柄木が脳無の拳の先に目を向けると、そこには十字架ククロスの前腕部で受け止め持ち堪えているアレンの姿があった。爪をスパイクのように地面に突き立て事で何とかその場で踏みとどまっていた。

「……っ！」

個性を発動させている状態のアレンの左腕は怪力と音速を誇る。そんな十字架ククロスでさえも脳無の攻撃にはギリギリでしか反応できなかった。

「……転換！」

その言葉を唱えた瞬間、アレンの十字架ククロスは淡い光を帯びながら変化した。それまでの鉤爪状だったものが、砲身へとその形状を変えた。左手があつた部位は砲口となり、その周りには光り輝く花卉のようなものが放射状に広がっている。

一連の流れを見ていた常闇は驚きで目を見開いた。

アレンは十字架ククロスの構えていた角度を変え、脳無の拳を左方へ逸らす。そして脳無の右肩に砲口を密着させ渾身の力を込める。ギューン、と高音が響くのと同時に砲口が輝きに染まる。

「十字架ククロスノ杭!!」

十字架ククロスの砲口から放たれたエネルギーが脳無の身体を消し飛ばす。直撃した右肩は抉られ、上腕部から先が力なくダラリ、と下がる。呼吸が荒くなっているアレンは無理矢理口角を上げる。

「シヨック吸収だろうと、こういうのは効くみたいですね」

「ああ。さすがは名門校の生徒だ。脳無にダメージを与えるなんて

な。でも——」

右肩が貫通し大怪我を負っている脳無。だが、その傷は時間が巻き戻されるかのように修復される。アレンはその脅威的な回復力を目の当たりにして呆然とする。自分の力が通用しない強者の存在に顔が強張っていく。額に一筋の汗が伝う。

「——無駄なんだよ。脳無はショック吸収だけじゃない、超再生もあるんだ。ガキが倒せるレベル超えてるよ」

その時、死柄木の元に黒い靄とともに黒霧が現れる。

「死柄木弔。13号は行動不能にしたものの、散らし損ねた生徒の一人に逃げられました」

「……は？ はあー……何やってんだよ、黒霧。お前がワープゲートじゃなかったらぶつ殺してるぞ……。さすがに何十人ものプロ相手じゃ敵わない。ゲームオーバー……。ああ……今回はゲームオーバーだ」

死柄木は苛立ちを感じ、両手で首を掻きむしる。だが、何か思いついたのか直ぐに手を止める。

「……脳無、そのガキ殺すのはやめだ。帰る前にこの手で壊してやろう」

死柄木はアレンの腕を掴み持ち上げている脳無の元へ一歩また一歩とゆつくりとした足取りで近づいていく。その足取りはヴィランに脳無に捕らえられているアレンの恐怖心を煽っていた。

「その左腕、すごいよなあ。本気じゃないにしても脳無の攻撃に反応して受け止める事もできた。さぞご自慢の個性なんだろうなあ。それを失ったらどんな顔をするのかな、お前は？ オールマイト、あいつは生徒のヒーローとしての未来が滅茶苦茶にされたのを知ったらどうするのかな？」

アレンの十字架クロスへと左手を伸ばす死柄木。小指から薬指と一本ずつ順に触れていく。楽しくて仕方ないといった様子だが、手で覆われ隠されたその顔には屈折した感情が浮かんでいた。

「俺の意思次第でお前の左腕は崩壊する。そうなれば個性は消えヒーローとしての道も途絶える。なあ、どうだ？」

自分では敵わないという敗北感、自分の個性を消されるかも知れない恐怖心、相澤に重傷を負わせた事への怒り、様々な感情がアレンの中で渦巻いていた。全身が、表情が強張っていた。しかし、

「……たとえこの左腕を失ったとしても、ヒーローになれないとしても、僕は人を救う事をやめない。だから僕の未来が変わる事は何一つない」

そう言い放ったアレンの眼には覚悟が宿っていた。これだけは譲れないという意地が表れていた。

「なんだよ、シラけるな。……まあいいや、オールマイトのヒーローとしての矜持は壊せるだろうし」

期待外れだ、と死柄木の左手の親指、五指の最後の一本が触れる。

「……しかし、アレンの左腕には何の変化も訪れない。」

「——本っ当かつこいいいな、イレイザーヘッド……！」

死柄木の個性『崩壊』は発動しなかった。相澤は身動きこそ取れないもののその眼で生徒のを救った。相澤の個性『抹消』は凝視している間、視た者の個性を抹消する事ができる。

「けども、あと何秒だ、限界が来て瞬きするのは？ その時が来たらこいつの左腕は崩れるぞ？ プロの矜持を見してくれよ、イレイザーヘッドオ……！」

ヴィランとの戦闘時の度重なる使用、個性が通じない脳無からの多大なダメージ、元々患っているドライアイ、様々な要因が合わさり今の相澤の個性使用可能時間は短くなっている。死柄木の個性を抹消していられるのも僅か数秒。

「まだ保つのか……。頑張るねえ、さすが——」

死柄木の挑発の最中、閉じられていたUSJの扉が吹っ飛んだ。そして現れた、平和の象徴オールマイトが。

「もう大丈夫。私が来た!!」

「——……コンティニューだ」

アレンが窮地を脱する切っ掛けとなる人物が登場する。

ヒーローならば、

水難ゾーンに飛ばされた僕らは個性を知られていないというアドバンテージを利用して何とか乗り切ることができた。

相澤先生が大勢の敵を引きつけているのを見て何か手助けを、負担を減らせればと考えてしまった。

改めて考えると慎重じゃなかったけど、初戦闘は勝つ事ができた。だからきつと勘違いしてしまったんだ、僕らの力は敵にも通用するのだと。

でも、ヴィラン。プロの世界。

——僕らはまだ何も見えちゃいなかったんだ。

絶望的だった。多数の敵を制圧し続けていた相澤先生がたった一人のヴィランにやられた。見るからに重傷を負っている。

「相澤先生……」

相澤先生を取り押さえているヴィランは先生の腕を握り潰し頭を地面に叩きつけた。

「緑谷ダメだ……。さすがに考え改めただろ……?」

「ケロ……」

ヴィランの圧倒的な力、凄惨な光景、先生の痛ましい姿に前言撤回を求める峰田くとそれに同意する様子の蛙吹さん。

声には出さなかったけど、僕も考えが甘かったと思ってる。こんな奴がいるなんて想像力が足りなかった。

「……どうしたら——……!」

その時、突如そのヴィランに薄い緑色に光る銀色の何かが激突した。

「あれは……!」

「亜蓮ちゃんの個性かしら?」

「マジかよ!? あいつの左腕あんな速く動かせるのかよ!」

銀色のそれが伸びている先に目を向けるとそこには常闇くんと亜蓮くんの姿があった。左腕にオーラみたいなものを纏っているよう

に見えるし……まさに目にも止まらぬスピードって感じだ……って、いや、それどころじゃない！ 先生も巻き込んで……ない？ あのヴィラン今の攻撃を受け止めたのか……!?

「おいおい。いきなり攻撃仕掛けてくるなんて、物騒だろ。これだからヒーローは……。自分たちの暴力は正当化するんだ。……——脳無にそんなのは効かないんだよ。なんせショック吸収を備えた対オールマイト用の怪人だ」

ショック吸収、対オールマイト……あの脳みそヴィランがオールマイトを殺すための算段なのか！ ……脳みそヴィランがオールマイトのパワーとスピードに対抗できるなら、僕じゃ絶対に敵わないってことに……。

いつのまに脳みそヴィランが亜蓮くんのところへ移動して——いや、攻撃した。さっきまで先生の近くにいたのに……速すぎる……！

亜蓮くんは？ ……防御できて……るのか？

どうする？ 考えろ何をすれば良い？ 今何が最善だ？ 常聞くんは……他の敵に囲まれてる。手助けは無理か。先生を避難させる？ 考えろここから先生までの距離は？ 亜蓮くんはこの後どうするんだ？ 作戦があるのか？ 僕が何かしたら邪魔になるのか？ 考えろ考えろ考えろ！

亜蓮くんの左腕が……大砲みたいになった？ そんな事も出来たのか！ 零距离射撃……！ あのヴィランにダメージを……！

「やってくれたぜ、亜蓮！ ダメージ与えたぞ！」

峰田くんは、さつきとは打って変わって喜んでる。正直、僕も同じ気持ちだ。あの脳みそヴィランを亜蓮くんが抑えられるなら今のうちに相澤先生を救けないと……！

「いえ、待って。あのヴィランの怪我もう治り始めてるわ……」

蛙吹さんの言った通り、亜蓮くんの攻撃で貫通していた肩のところが塞がっていく。

そんな……ショック吸収の個性じゃなかったのか!? 回復？ 再生？ もう傷が完治して……。

その時、モヤのヴィランが現れた。

「死柄木弔。13号は行動不能にしたものの、散らし損ねた生徒の一人に逃げられました」

「……は？ はあ……何やってんだよ、黒霧。お前がワープゲートじゃなかったらぶっ殺してるぞ……。さすがに何十人ものプロ相手じゃ敵わない。ゲームオーバー……。ああ……今回はゲームオーバーだ。……脳無、そのガキ殺すのはやめだ。帰る前にこの手で壊してやろう」

「……！ ヴィランの手が伸びて……相澤先生みたいに……マズい、亜蓮くん、助け、られるのか、僕に。間に合わない、どうすー」

「——本っ当かっこいいな、イレイザーヘッド……！」

先生の個性！ いや、長くはもたないはず。ヴィランの注意が先生に向いてるうちに——



「もう大丈夫。私 came!!」

「——……コンティニューだ」

その時、アレンが窮地を脱する切っ掛けとなる人物が登場した。

「手エ放せっ……！」

ヴィランたちの注意が相澤へと向かっている状況を利用して緑谷はアレンたちに接近していた。そしてオールマイトが登場した事でその場の全員の意識が一点に集中した瞬間を狙い、個性を使用して飛び出し、死柄木に殴りかかった。緑谷の拳は、アレンに触れていた死柄木の左肩を捉え、殴り飛ばす。死柄木はその威力によるめき倒れる。

「——……つたいな……。おい、黒霧。何やってんだ、ちゃんと守れよ」

「すみません。生徒の存在は把握していたのですが、まさかここまでこのスピードだとは……」

黒霧は弁解しながら死柄木を起こす。

緑谷は自損した左脚を引きずりながら、アレンの腕を掴み拘束している脳無にも殴り掛かろうとする。が、実行に移す前に脳無に腕を抑えられしまう。

「……調子に乗るなよ。ガキじゃ敵わないって言ってるだろ」

苛立ちを隠そうともせず、アレンの告げた台詞と同じ事を緑谷に吐き捨てる。

「——か。だったら、私が相手をしよう！」

そう、オールマイトが言い終えた時には既にアレンたちの元へ移動し生徒二人を脳無を救うだけでなく相澤も避難させていた。一瞬の出来事である。

「……とても目じゃ追えないスピードだ。——……でも思っていた程じゃない。本当だったんだ、衰えてるってのは」

オールマイトの身体能力をその身で体感した死柄木は、オールマイトの衰えを確信した。その事実喜びながら脳無に新たな指示を出す。

「脳無、オールマイトを抑えろ。あの社会のゴミをさっさと殺そう！」
死柄木が指示を出した事に対してアレンは自分の知っている脳無の情報をオールマイトに伝える。

「あの脳みそヴィランは奴ら曰くショック吸収で、身体能力も高いです。加えて再生能力も持っていました。貫いた肩があつという間に治る程です。あと、あいつは対オールマイト用の怪人で殺すために来ただとか言っていました」

「黒いモヤモヤしてる奴の個性はワープです。モヤがワープの出入り口になってます。もう一人のたくさん掌つけてるほうは、素手で触つて壊す、崩す感じだと思います」

「なるほど。詳しい情報サンキューだ！ 亜蓮少年、緑谷少年。相澤先生たちと避難してくれ」

指示を受けたアレンは十字架クロスを解除して足を引きずる緑谷と共に相澤の元へと駆け寄る。同じく駆け寄っていた蛙吹と峰田の二人とも合流する。

「相澤先生、大丈夫ですか？」

「……大、丈夫……だ。早く、13号のところへ……避難し……ろ」
意識が途切れそうな状態で相澤は緑の中に答える。その様子を見たアレンは他三人の生徒へ話し掛ける。

「峰田と蛙吹は相澤先生を担いでくれませんか？ 緑谷は脚を怪我してますから」

「亜蓮くんはどうす……！ 左腕！ 崩れ、大丈夫!？」

アレンの行動について確認しようとした緑谷はアレンの左腕が崩れている事に気がついた。それは相澤の肘のような怪我だった。緑谷によって袖を捲られ、微かに震えている腕が晒される。

「まさかさつきヴィラン……！ 間に合わなかったのか……」

もつと早く脚を踏み出していれば、と自分の行動を悔いる緑谷。アレンは後悔し始めた緑谷を落ち着かせるように訂正する。

「これは僕の個性の単なる副作用、筋肉痛みみたいなもんです。あいつの個性とは関係ないですよ」

「そう、なんだ……それで亜蓮くんはどうするの？」

ヴィランによる怪我ではないと知り、緑谷は少しほっとしつつも改めて確認する。

「常闇がまだ向こうで戦っているので加勢に行きます。あの人数を一人で相手するには手に余るでしょうし、僕の所為でもありませんから……」

アレンの心境は複雑だった。

あの時、自分が攻撃を仕掛けなければ相澤は復帰できない程の重傷、いや命そのものが危うかった。

とはいえ、その結果アレンは絶体絶命のピンチに陥り、怪我を負っている先生には無理をさせ、同級生には脚を負傷させ窮地に巻き込んでしまった。

さらには、突然行動を起こした為に常闇をヴィランに囲まれた状態で孤立させてしまった。

感情に任せて動いた事で、様々な人を危険に晒した。もしオールマイイトが間に合わなければ最悪の事態になっていただろう。

羞恥、自責、後悔、そんな感情を抱きつつ少しでも状況を改善、い

や自ら引き起こした現状を挽回する為、クラスメイトを救ける為に、常闇の戦闘に加わろうと考えた。

「じゃあ、僕らは相澤先生を連れて避難するよ」

「オールマイトが目的とは言え、あのヴィランには注意を怠らないようにしてください」

「亜蓮ちゃんも気をつけて」

「無理すんなよ！」

蛙吹と峰田からの言葉を受けつつアレンは常闇のいる方向へ走り出した。

常闇が今戦っているヴィランの人数は8人。アレンが飛び出して一人で戦い始めた時には1人いた。撃破した人数は3人、常闇の戦闘能力から見れば3人というのは些か少ない。これは状況の変化がいくつかの要因となっていた。

常闇はヴィランたちに囲まれた当初、逸早くアレンの助太刀に向かう為、急いで倒す事を目指していた。

しかし、オールマイトが現れた事でその考えを改めた。積極的に攻撃する事で隙を晒し捕まり、人質になる可能性を恐れた。先程とは異なり既に最悪の状況は脱しているのである。ここで無理をしてオールマイトの足を引く張る事は避けたかった。攻勢に出ることでヴィランたちを倒すのではなく、守りに徹して確実に生き延びる道を選んだ。

またもう一つの要因、ヴィラン側も常闇の戦闘能力を見誤っていた。見縊っていたとも言える。

倒された3人のヴィランは特に短絡的、思慮の浅い者たちだったが、それは自らの戦闘力に自信を持っていたからに他ならない。その事実が残ったヴィランも認めていた事である。よってヴィランたちの常闇に対する警戒が高まり、彼らの積極性を抑えていた。

常闇とヴィラン、双方の考えが合わさり互いに牽制し続ける状態に陥っていた。

そんな状況に変化がもたらされた。常闇と同じく高い戦闘力を誇るアレンの存在である。

「クロス・グレイヴ
十字架ノ墓!!!」

アレンは普段以上の、必要以上の声量で技名を叫んだ。これはヴィランたちの意識を常闇から晒すためである。

そこにいるヴィランからすると、生徒の一人が技名らしきものを叫んで接近しているのである。当然、無視する訳にはいかない。

一方、常闇は一緒に戦闘をこなした後であり、それがどのような攻撃なのかも知っている。したがって、ヴィランよりも対応が速かった。

「闇 影!」

ダークシャドウ

ダークシャドウ

常闇は闇 影に指示を出した。アレンから離れた位置にいるヴィランを薙ぎ払うように攻撃した。その不意の一撃にヴィランたちは為す術もなく意識を刈り取られる。

残ったヴィランは、アレンと常闇の二人に気を乱され注意が散漫する。常闇の攻撃から一瞬の間を置き、叩きつけられるアレンの十字架。

アレンが駆けつけてから僅かな時間で制圧を完了させた。元々、常闇一人でも何とかできた戦力の相手である。が、ただ捕まえられるかも知れないほんの少しの可能性があったので、慎重に期していただけである。

「……常闇。すみません、僕の勝手な行動で——」

「気にするな。他者を助けようとした故の行動だ。俺は咎めん」

常闇は必要ない、とアレンの謝罪を遮る。アレンへの気遣いもあるが優先して決めたい事があるからだ。

「それよりも、この後はどうする?」

「あちらで緑谷たちが相手先生と一緒に避難しています。僕らも合流しましょう」

「御意。人質にされオールマイトの枷となつては困るからな」

アレンと常闇の二人はオールマイトを信じて他の生徒と合流する事に決めた。No. 1ヒーローならば多対一であっても必ずヴィランを撃退できると信じていた。

ヴィランであつても、

USJ内の水難ゾーン付近で3人のヴィラン、死柄木と黒霧、そして脳無と一人のヒーロー、オールマイトが向かい合っている。

オールマイトの近くにいた生徒らがその場から離れると同時に、オールマイトもまた動き出した。接近しつつ腕を引いて身体の捻りを加えた拳を脳無へ突き出す。

対して脳無は何の構えを取ることもなく、腹部でオールマイトの拳を受け止めた。脳無は両腕を広げて掴みかかろうとするが、オールマイトは一步後ろに下がり仰け反るような体勢で回避。そして、オールマイトはそのまま脳無の腕を掴み抑える。

オールマイトはここに来るまでに制限ギリギリの約3時間の活動をした事で、マッスルフォームを維持する事が困難な状態である。脳無が天敵である事を差し引いても苦戦していた。

「なるほどッ……！ ショック吸収にこのパワーとスピード、私を殺すというのもハツタリではないようだね！」

「ああ、そいつの身体能力はあんたに匹敵する。耐久力でいえばショック吸収の分、上回ってるよ。なんせ殴る蹴るが効かないからね。ダメージを与えたかつたら、肉をゆつくり抉り取るとかオススメするよ」

「……おいおい。いくらなんでもそれは、……誘導が、あからさま過ぎじゃないか？」

オールマイトは脳無を抑えつつも死柄木や黒霧を常に視界から外れないようにしていた。黒霧や死柄木から何をされても対応できるように。

「やっぱり警戒されるよな……。ガキどもから俺たちの個性を聞かされてたし……はあ」

死柄木はオールマイトと脳無の戦闘に口を出しつつ計画通りに進まない事を察する。そして避難している相澤や蛙吹、峰田たちの後方で後ろ髪を引かれている緑谷を指差して、命令を出す。

「黒霧、さつき俺を殴ったあのガキ拉致ってこい。人質にする」

「ええ。わかりました。今ならば、可能ですね」

この場において黒霧を抑える事の出来るヒーローはただの一人もいない。13号は既に黒霧との戦闘で負傷し少し離れた場所から動く事が出来ない。イレイザーヘッド、相澤は複数のヴィランとの連戦で体力を削られ、脳無により一人ではまともに動けない程の重傷。そして今、オールマイトは脳無と戦闘が拮抗状態に陥っている。

黒霧は黒い霧を緑谷たちへと伸ばす。オールマイトが阻止する為に動こうとするが、脳無がそれを許さない。オールマイトの動きを阻害する為だけに立ち回りになる。

「……くっ！ 早く、避難するんだ！」

オールマイトの声も虚しく、黒霧は緑谷へと迫る。

「ふっ、もう遅いですよ」

迫ってくるヴィランに緑谷は対抗策が思い浮かばず、立ち竦む。

黒霧が緑谷を捉えるまで残り僅かというその時、

「退け！ 邪魔だ、デク!!」

爆豪が声を張り上げながら両の掌を爆発させて飛び出した。そのまま黒霧の背後から右手で首を掴み、地面に押し付けるように抑え込む。

「お前、霧で覆えない箇所があるんだろ。物理無効人生なら『危ない』なんて発想はねえ筈だからなあ！」

「かっちゃん……!!!」

思いもよらぬ救援に驚く緑谷。だがクラスの上位、どころかプロでも通用する程の個性やタフネス、戦闘力を持つ爆豪が自力でヴィランを突破しこの場に戻ってくるのは必然であった。

そして援軍は爆豪一人ではない。オールマイトと取っ組み合っていた脳無は突如、足元から冷気に覆われ一瞬の内に下半身が凍りつく。

「お前らに平和の象徴はやらせねえよ」

脳無の足元から延びる氷の先には轟焦凍の姿があった。彼の個性「半冷半燃」によって右半身から発する事の出来る冷気をもたらす氷結の拘束である。脳無が身動きを取れなくなった事で距離を取る

オールマイト。

さらに現れる最後の援軍、切島は個性「硬化」を腕に発動させつつ死柄木に奇襲を仕掛ける。

度重なる生徒の登場に周囲を警戒していた死柄木は、切島の攻撃を回避した。

「くっそ！ 良いとこねえ！」

唯一、攻撃を避けられた切島は悔しさを言葉にしつつ黒霧を抑えている爆豪らの元へと移動する。

そこへアレン、常闇の2名と轟も合流。

「常闇は相澤先生たちと一緒に避難してくれませんか？ まだ他にヴィランが潜んでいるかも知れませんが、護衛も兼ねて」

アレンは常闇に避難の付き添いを頼んだ。全方位に隙がなく攻撃の範囲や威力を調整しやすい闇影ダークシャドウが護衛として望ましいと考えたからである。

「御意」

常闇は短く返答し、すぐさま避難中の蛙吹らに同行する為に移動した。

「妙な真似すんじゃないぞ。少しでも動いたら——」

「……私は何もしませんよ。……私はね」

爆豪が首に当てた右手で小さな爆破を繰り返しながら、脅迫とも言える行為している中、黒霧が口を挟む。

「ああ？ てめえ、何言ってるん——……!!」

突如、黒霧の顔から一本の腕が現れる。伸びきった指先は真っ直ぐに爆豪の顔へと迫っていく。爆豪は持ち前の反射神経で直撃を回避するも、その指先は肩に触れ体勢を崩す。その一瞬の隙をつき黒霧は死柄木の側へとワープした。

「大丈夫か!? 爆豪少年！」

「……何ともねえよ」

そんな動揺している様子のヒーローを見て死柄木が話しかける。

「何驚いてんだよ。仲間が敵てきに捕まったんだ。助けるために味方が手を出すのは当然の事だろ？」

その横では、黒霧の靄から全身を出し新たなヴィランが姿を現した。大きなフードと仮面で顔を覆い、外套を身に纏っている。

「本来ならあなたは、オールマイトを殺す時の駄目押しで出てきて欲しかったのですが……」

「あんたが、捕まっただのが悪い。油断してたんだろ？ 悔り過ぎだったんだよ、あいつら雄英生を。なまじ強個性を持つてるから、慢心しちゃったんでしよう？ んん？」

ここぞとばかりに、外套のヴィランは黒霧を責め立てた。その口調からは怒っているではなく、揶揄つて楽しんでる事が窺える。またその声は加工しているのか男性にも女性にも聞こえるような声色になっている。

一頻り、揶揄った後外套のヴィランは死柄木に問いかける。

「それで、弔、どうすんの？ このままオールマイト殺るまで続ける？

それとも撤退する？」

「……当然、続けるさ。おい、脳無さつさと動け」

死柄木の言葉と同時に、脳無は自身を凍結している氷を自らの下半身ごと拳で叩き割る。当然、支えのなくなった脳無の身体は地面に落下するが、尋常でない再生能力を発揮したちまち元通りになった。

「生徒らの加勢がなければ、我々4人で充分でしょう」

「おいおい、ふざけてる？ 黒霧。それはヒーローに対する認識がま

るでなっていない。今ここでオールマイトを殺るのに生徒の加勢なんて問題にならない」

そう言うと、外套のヴィランはオールマイトの方を向き、軽やかに芝居掛かった口調で話しかける。

「やあ、オールマイト。ご存知かと思いますが、この度我々、ヴィラン連合が此方に襲撃したのはあなたを殺す為です。生徒が目的ではありません。……とはいえそれは、危害を加えない事とイコールではない。怪我させたくなければ、手を出さないようにちゃんと言い聞かせてくださいね」

そんな脅迫に対して轟が真つ先に反論する。

「そんなの『生徒の加勢があるとオールマイトを殺せない』って言って

るようなもんじゃねーか。わざわざ数の有利を手放す訳ないだろ」

「数の有利？ いやいや、そんな簡単な状況じゃないよ。そもそもお互い勝利条件が全く違う。此方は『どれだけ被害を出してもオールマイトを殺す事』に対して、其方は『生徒に被害を出す事なくヴィラン全員を捕獲または退却させる事』だ。……ん？ 『ヴィランに侵入された時点で雄英は負けた』とも言えるか？ まあ、いいか。話を戻そう。もし生徒1人でも再起不能の怪我を負えばその瞬間、お前はゲームオーバー。だったら戦わせないのが賢い選択だろ。さらに言えば、自衛の為でもなく生徒に戦闘させるなんて教師の風上にも置けない。まして生徒に手伝ってもらわないとヴィラン退治すら出来ないなんて、そんなのNo. 1ヒーローと言えるのか？ ふふ……。君たちが加勢するのなら私はオールマイトよりも君たちを優先して殺しに行く。結果、殺せなかったとして手足の一本でも潰せたらそれで良い。生徒を、罪のない子どもを、守りきれなかったオールマイトは、教師としてもヒーローとしても『死ぬ』事になる。弔は不満かも知れないが、私はそれでも構わない。……さあ、どうする？」

淡々と語られたヴィランの作戦に言葉を失う生徒たち。それは今まで経験したことのない悪意だった。相手の善意を、誇りを、守りたいものを、壊したいだけだという自分勝手な思考だった。

「君たちの相手をするのは、私だけだ。生徒に手は出させない」

「……そっか、つまんないな。……それじゃあ頑張れ、弔と黒霧！ あと脳無！ 私はやる気なくしたから、ここで応援してるよ」

「……ちっ、……脳無！」

死柄木の呼び掛けとともにオールマイトへ突進する脳無。オールマイトも脳無に殴りかかり互いの距離がゼロになった時、突きのラッシュの応酬になる。

そんな激しい戦闘が行われている中、外套のヴィランが生徒に釘を刺す。

「あつ、あんな事話した後だけど、生徒諸君は避難せずに、そこから一歩も動かないでね。もし動けば人質にした生徒を殺すから」

「人質がいるという証拠は？」

「ないよ。情報は何もあげない」

「……人質いるというのは嘘でしょう？ 本当に人質がいるなら、顔や声を出したほうがより効果的だ。情報を明かさないと——」

「……あのさあ、白髪頭くん。ヒーローの巣窟である雄英高校に襲撃するようなヴィランに合理性を求めるなよ。どうせ、お前らは『人質がいるかも知れない可能性』を無視できないんだ。未だに安全を確認してないクラスメイトは何人いる？ そいつらが捕まってない保証は？ 自分の無力さを理解したら黙ってる、未熟者」

人質の存在を否定したアレンに対して外套のヴィランは人質の有無をばかしつつ罵倒する。

「それにしても、脳無相手に真正面からの殴り合いなんて何を狙っているのやら」

「シヨック吸収って言っただろ。馬鹿なのか」

ヴィランたちの蔑みの言葉を余所に、脳無との殴り合いを続けるオールマイト。しかし、その状況は変化する。徐々にオールマイトが押し始め、僅かに優勢になる。2人の攻防は周囲に突風を巻き起こし、ヴィランも生徒も関係なく全ての人間がその場に止まる事で精一杯でありその戦闘に参加するなど考えられない程である。

「シヨック『無効』ではなくシヨック『吸収』なんだろう！ ならば吸収できる限度があるんじゃないか!? その限度を超える為に、私は私の限界を超えればいい!! ヒーローとは常にピンチをぶち壊していくもの。ヴィランよ、こんな言葉を知ってるか!!」

—— PLUS ULTRA!!

オールマイトの全力を、限界を超えた、天候をも変える程の一撃が脳無に直撃する。脳無は全身で地面を抉りながら低い軌道で吹っ飛ぶ。

「やはり、衰えた。全盛期なら5発も撃てば十分だったのに、500百発以上も撃ってしまったよ……!!!」

砂埃の中に佇むオールマイトは残っている3人のヴィランを睨みつけた。その鋭い眼光に、威圧感に思わず後ずさる。

「さてとヴィラン、お互い早めに決着つけたいね」

「あの脳無を吹っ飛ばすとか……、人間なのかあれは……」

「衰えた？ ウソだろ、完全に気圧されたよ。よくも俺の脳無を、チートが！」

「どうした？ 来ないのか？ クリアとか何とか言ってたが、出来るものならしてみろよ」

「っ……！」

信じられないといった様子で狼狽える外套のヴィランと死柄木。黒霧はそんな2人を落ち着かせるようにゆったりとした口調で話しかける。

「お二人とも、冷静に。確かに脳無はやられてしまいましたが、ダメージは確実に表れている。我々3人でも十分に殺せるはずですよ」

黒霧の言葉通り、オールマイトは限界を迎えていた。『平和の象徴』としての姿、マッスルフォームを維持するのもやっとの動く事すらままならない程の状態であった。

「そうだな。……そうだよ、そうだ。やるっきゃないぜ、目の前にラスボスがいるんだもの」

オールマイトに向かって走り出す死柄木と外套のヴィラン。

そこへ1人の生徒が飛び出した。この場でただ一人、オールマイトの限界を正しく把握していた少年、緑谷である。折れていなかったほうの脚に『個性』を発動させ、全力で飛び出していた。

爆豪が見つけた黒霧の弱点に狙いを定め、拳を強く握り、殴りかかる。

しかし、緑谷の接近を察知した死柄木は黒霧の『個性』に腕を通して五指を緑谷へと伸ばす。

死柄木の五指が緑谷の顔に触れる寸前、ヴィランの足元の地面に光弾が撃ち込まれた。その威力によって死柄木は体勢を崩し倒れこみ、勢い余った緑谷は地面を転がる。

「……君たち、人質はどうなってもいいの？」

外套のヴィランは呆れたような、驚いたような表情で尋ねる。

「人質なんて、いないんだろ。いるんならオールマイトを殺す為に使うはずだ……」

「はあ、天下の雄英生だもんな。冷静になればそりやバレるか……」
緑谷の返答に外套のヴィランは自嘲気味に呟いた。

「——さて、ここからは生徒たちも参戦かな……」

「ちっ、ちゃんと抑えとけよ、プルトン」

「脳無の応援してる片手間に出来る事じゃなかった。私の負担が大き
——……っ！」

死柄木にプルトンと呼ばれたヴィランの弁明中、死柄木に銃弾が撃ち込まれる。弾道の先の門には飯田と何人もの雄英教師、即ちプロヒーローの姿があつた。

「A組クラス委員長、飯田天哉、ただいま戻りました!!」

USJ内に残っていたヴィランも駆けつけたプロヒーローにより次々と制圧されていく。

死柄木とプルトンは数発の銃弾を受けつつも黒霧を盾にする事でやり過ぐす。

「これ、もう絶対無理じゃん。帰ろうぜ……?」

プルトンは戦力差が圧倒的になった事で死柄木と黒霧に撤退を促す。

「……くそっ」

死柄木とプルトンを黒霧の『個性』が包み込み、そして黒霧自身をも覆い隠し徐々に小さくなりやがて始めから存在していなかったかのようにいなくなった。が、辺りの惨状がその現実を主張している。主犯格である死柄木とプルトン、黒霧の3人はUSJから姿を消した。

こうして敵連合の雄英襲撃事件は幕を下ろした。

——しかし、これは後に起こる事件の始まりに過ぎない。

敗北を糧に。

「ああ、くそっ……殺せなかった……」

屈辱に苛まれる死柄木。十分な戦力を備え計画を実行し自分にミスはなかったと憤慨し苛立ちを感じている。

USJから撤退した死柄木はバーの床に俯せに倒れていた。

「完敗だよ……。手下どもは瞬殺された……。生徒も強かった……。かなり邪魔された。——……。そして、なにより……!!」

死柄木はモニターに向かって叫ぶ。

「……オールマイトは衰えているんじゃないのか!? 先生!」

「そんな事はないさ、弔。確かに殺せなかったが、実際オールマイトは全盛期のそれよりも数段階弱い。今回は、見通しが甘かった」

モニターに映っている死柄木から先生と呼ばれた人物は、死柄木や黒霧の報告を受けていた。

「脳無はどうだった? わしと先生の最高傑作なんじゃが……」

「オールマイトを追い詰める事は出来ましたが、最後は殴り飛ばされました。……何とか回収できたのは不幸中の幸いでした」

そこでもう一人の主犯、プルトンが口を挟む。

「回収可能だったのは私のおかげでしょう。まあ、自分の為でもあるけど。……それにしても、あんな入試を合格しただけあって中々強かったねえ、生徒たちも」

「……生徒。ああ、そうだ。あのガキめ、最後にあいつが邪魔さえしなければ……!」

「うん、あいつは凄かった。あのスピード、オールマイトにも匹敵するんじゃないか?」

「ほう……」

オールマイトに匹敵する子どもの話に興味を持った『先生』は、機嫌良く相槌を打つ。

「ところで、約束通りあの脳無は私にしてくれるんですね、先生?」

「もちろん、君に従うように改良しておこう」

「待て、何の話だ?」

『先生』とプルトンの会話の内容に不満があったのか、話を遮る死柄木。

「何の話も何も、今回の襲撃は私の『個性』の実験も兼ねさせてもらったんだ。オールマイトには勝てなかったけど、実戦でも問題なく活用できた。結果如何に関わらず、あの脳無は私専用にさせてもらう」

「ああ？ まさかお前手エ抜いたりした訳じゃないだろうな？」

「それこそまさか。真面目にやらなきや実験にならないし」

と、そこまで聞いた死柄木は苛立ちを隠そうともせず、その場から離れる。

「荒れてるなあ、甲。あんなんで襲撃した意味ないですよ？ 人集めたりとかの手間が無駄になっちゃったか……」

「無駄じゃないさ。今回の事は必ず甲の糧となる。ヒーローもヴィランも関係ない。失敗から学ばせ、成長を促す。それが教育には大切なこと」

「はあ、なるほど。そんなもんなんですわね」

「ああ、そんなもんなのさ。——それで、君のもう一つの目的はどうだったんだい？」

唐突な『先生』からの質問に、プルトンは笑顔で答えた。

「見つけました」

「そいつは、良かったじゃないか。これでようやく君の復讐が始まるわけだ」

プルトンは笑顔のまま首を横に振り否定する。

「いやいや、私のは復讐なんて仰々しいものじゃないですよ。……ただの八つ当たりです」



「負けた……勝てなかった……。……それに……。あれは……」

敗北感に苦しむアレン。自らの実力を過信していた事を改めて実感し、その傲慢に羞恥を感じている。

更に、死柄木に追い詰められた時の事が引つかかっていた。ヴィラ

ンとの戦闘中に生じた、その違和感を無視できないでいた。

USJを襲撃したヴィラン連合が撤退した後、アレンは孤児院に帰宅してからずっと自室で思い悩んでいた。

そしてしばらくして、部屋にノックの音が響いた。コンコンという音にふと我に返ったアレンは入室を促した。

「……どうぞ」

普段、アレンの部屋にノックする者は限られている。マナーに気を付けている硝子とアレンに対して兄弟子としてある程度の敬意を持つている弾、そして基本的に孤児院にいる唯一の大人である瀬和、この3人が該当する。

幼い子供二人はそもそもノックをしない。大人がアレンに用がある場合は、基本事務所に呼び出される事が常である。

この時、アレンは無意識にこの3人が呼びに来たと思っていた。しかし、ドアを開けて現れた人物は硝子でも弾でも瀬和でもなかった。アレンの師匠、毒島がアレンの部屋を訪れていた。

予想外の訪問者に目を見開くアレンだが、次の瞬間には元の表情に戻った。

「珍しいですね……。師匠が部屋まで来るなんて」

「雄英からヴィランに襲撃されたって連絡がきた。で、仕事終わらせて事務所に戻ったら、お前が帰ってからずっと部屋で悩んでるみたいだって心配してる子どもたちの様子を見てくれと頼まれた。だから来た」

皮肉交じりのアレンに毒島は部屋に来た経緯を簡素に説明した。

「アレンは何を悩んでんだ？ 雄英から聞いた限りでは、全員無事にヴィランを退けたそうだが……。何かあったのか？」

「チンピラのような敵を何人か倒して、思い上がってました……。主犯格には手も足も出なかつた……。！ どころか、友達を危険に晒してしまった！ ……それが、何というか、……。悔しくて……」

アレンは毒島に対して素直に心情を打ち明け始めた。

「……それだけじゃない。ヴィランの言葉を間に受けて、オールマイトのピンチに手を出せなかつた。友達クラスメイトが飛び出したなければ、僕は

何も出来なかった……」

己の慢心を、後悔を、羞恥を、今感じている自身の弱さの全てを曝け出していた。

そんなアレンの言葉を聞き終えた毒島は口を開いた。

「……真面目だなあ……アレンは」

「……え？」

「いや、真面目じゃなくて自信過剰か？ 全く反省しないのはどうかと思うが、アレンは考えすぎだ。……初のヴィランとの戦闘で何もかも完璧に出来るわけないだろ。お前は未熟、まだプロヒーローじゃない。これからヒーローになるんだ。今抱えてるその気持ちは、成長の糧にするくらいに心構えていろよ！」

「……そう、ですね。『慢心していた』と考える事が慢心ですね。……自分が最適解を選んで行動すればなんとかなる、だなんて思い上がりも甚だしい……」

一つの悩みが解決したアレンだが、新たなに発見した自身の無意識の思いに恥ずかしがる。

「ふふっ……。それで悩みはもうないか？」

「——んんっ！ ……ええと、師匠に確認したい事があるんですが……」

アレンは咳払いをし場の空気を真面目なものへとリセットさせ、話を次の話題へと変える。

「……？ なんだ？」

「……ああ、いや、すみません。やっぱりいいです」

アレンは話さなかった、残っている悩み、疑念を。それは疑心暗鬼に陥ってしまったが故に話せなかったのである。その疑念が当たっていた場合の事を考え話す事を躊躇ってしまった。

もし仮にアレンの想像した事が事実であったなら、それは、毒島がアレンを騙していたことになる。

——この左腕、本当にこれが僕の個性なんですか？

この質問がアレンが毒島に尋ねようとした疑念である。

これは、アレンが脳無に捕らえられた際に相澤の『個性』で死柄木

の『個性』を抹消した時に生じた違和感から思い至ったものである。あの時、アレンの十字架も間違はなく相澤の視界に入っていた。ならば抹消された死柄木の『個性』と同様に、十字架も発動前の赤黒いだけで普通の左腕の状態に戻るはずである。

しかし、アレンの左腕はオールマイトに救出されるまで、ずっと発動状態を維持していた。

その時のアレンは、自分の失態を反省していた為、漠然とした何かを感じつつもその事を気にしてはいなかった。が、自室で冷静になつて反省の為、自分の行動を全て一から思い返す事で気がつく事ができた。

脳無というヴィランの存在も、この疑念に拍車をかけている。

相澤との戦闘から脳無のオールマイトと同等のパワーは『個性』によるものではなく素の身体能力だという事が明らかである。

そして、死柄木の言っていた『作られた』という言葉。あれほどの力を人工的に作る事が可能ならば、自分の十字架も誰かの作ったとしてもおかしくはないのではないか。と、アレンは考えてしまった。それがどれほどのあり得ない事であっても、一度その可能性を疑ってしまった以上、無視できなかつた、幼い頃の記憶を持っていないが故に自分では否定する事ができなかつた。

「そうか。なら私は戻るぞ、仕事残ってるし。……今日は早めに寝ろてゆっくり休むように」

毒島は考え込んでいるアレンに、声を掛けて部屋を出ていく。

その際、口から溢れた眩きはドアを閉める音と重なり、アレンの耳には届かなかつた。

——勘付いたか？ お前の……に……

準備

ヴィラン連合の襲撃から2日後の放課後、アレンたちの所属する1年A組の教室の前には大勢の他クラスの生徒で人集りができていた。「待てコラ。どうしてくれんだ。おめーのせいでヘイト集まりまくっちまってんじゃねえか!!」

「関係ねえよ……」

敵情視察、宣戦布告などの目的で集まっていた生徒を前に不遜な態度で対応する爆豪。A組にヘイトが集まったと言う切島に対して、爆豪は関係ないと一蹴した。

「上上がりや関係ねえ」

一同はそんな台詞に思わず息を飲む。

「く……!! シンプルで男らしいじゃねえか」

「上か……一理ある」

それまで静観していたアレンが口を開く。

「まあ、どんな意図であれ初対面であの対応はダメでしょう……。本当にヒーロー志望なんですか? 彼は」

近い位置にいてその呟きが聞こえていた緑谷は、爆豪を庇うように呆れ顔のアレンに話しかける。

「かつちゃんはヒーローになるよ、絶対に。そこだけは何があっても変わらないし譲らないと思う」

「そんなもんですか……。ところで緑谷、頼みたい事とか相談したい事があつて、これから少し時間貰っても良いですか?」

「え? ああ、うん。良いよ」

「ありがとうございます。僕らの『個性』に関する事です。詳しいことは外に出てからで……」

アレンは廊下にいる生徒を掻きわけるようにして移動し始める。

『個性』に、関する……?」

緑谷に緊張が走った。出会ったばかりのクラスメイトに自分の秘密——『ワン・フォー・オール』について何か知られたのではないかという疑惑。緑谷は言いようのない不安を胸に抱えたままアレンの

後を追った。



「端的に言うと、一昨日使った僕の『個性』について黙っていて欲しいんです」

校舎から出て演習場にたどり着くと同時にアレンは話し始めた。辺りに人影はなく、そこにはアレンと緑谷の二人しかいない。

いったいどんな会話が始まるのかと不安に駆られていた緑谷はほっとしつつアレンに確認する。

「それってあのヴィランに攻撃した時の左腕のこと？ 授業で見た時とは違う形になってた……」

「その事です。体育祭が終わるまでお願いします」

緑谷の脳裏に浮かんだのはヴィランに捕らえられているアレンの姿。あの時、アレンは左腕を爪から大砲へとその形状を変化させ攻撃していた。ピンチになってから使用した事から、あれは秘密兵器だったのだろうと緑谷は判断した。朝、相澤から連絡があつた体育祭。勝つ為の考えなのだろう。

「奥の手的なものとして隠しておきたいって事か……。うん、わかつた。誰にも話さないよ！ ……あれ？ そういえば、僕以外にも見られてたよね？」

あの場面には他の生徒も何人かいた事を緑谷は思い出した。

「はい。あの時近くにいた常闇と蛙吹、峰田には昼休みに頼みました。因みに蛙吹と常闇には口止め料として今日の昼食代を代わりに払いました」

「……峰田くんには？」

「峰田には、師匠の写真を渡しましたよ。あ、緑谷にも差し上げましたよ。うか？ 写真なんてあまり出回ってないからレアですよ」

「それは……！ 是非っ！」

眼を輝かせ、即座に首肯する緑谷。

ドクの写真は以前、雑誌のインタビューをした時くらいのものしか

存在しない。非常に珍しく入手困難な代物である。ヒーローオタクである緑谷には願っても無い言葉だった。

喜ぶ緑谷にアレンは声をかける。

「では、君の『個性』について話をしましょう」

一転、その一言で緑谷から歓喜の感情が消え狼狽する。

「ぼ……僕の『個性』？　なん、で？」

「一昨日の朝、僕の十字架左腕について話した時、制御の仕方について聞くとしていたじゃないですか。緑谷は『個性』をコントロールできていないんでしょう。だから一緒に訓練しませんか？」

思い掛けない提案を受けて言葉に詰まる緑谷。自身の『個性』の真実は誰にも知られてはいけけない。ならば、制御の訓練を共に行うのは悪手ではないのかと考えられる。

しかし1人で訓練するよりも実際に『個性』の暴走を訓練で克服し制御したというアレンの助言が欲しいのもまた事実。

そこでふと緑谷は疑問に思った。

「どうして訓練に付き合ってくれるの？　奥の手を準備する程、体

育祭は勝ちたいんでしょ？　だったら、僕の訓練なんてしない方が……」

緑谷はそこまで口にして少し後悔した。わざわざ自分の為に訓練の提案をしてくれたクラスメイトに対して失礼な事を言ってしまったのではないかと。

そんな緑谷の心中とは裏腹に、アレンはあっさりと答える。

「確かに体育祭では競い合う敵同士になりますけど、困ってる人に手を差し出さず見過ごすようではヒーローにはなれないと思います。それに『個性』を扱い切れずにいるって不安じゃないですか。少なくとも僕はそうでしたから……」

後半からは、アレンは少し照れたように指で頬をかきながら自身の考えを伝えていた。

そんなアレンの考えを聞いた緑谷は決めた。

「ありがとう。訓練……、僕からお願いするよ。『個性』を制御する為に協力してくれるかな？」

「はい、もちろん」

「……それで、訓練って具体的にどんな事をするの？　　というか、そもそも亜蓮くんは実際にどうやって制御したの？」

緑谷は以前質問し聞きそびれていた事を改めて確認した。もしあの襲撃事件がなければ、その日の放課後にでも聞き自身の『個性』の制御にも参考にしていただろう。

しかし、不幸中の幸いか緑谷はあの事件で制御を可能にする一つの切っ掛けを得ていた。

「僕の場合は、……ええつと、そうですね。簡単に言うと『必殺技』のようなものを作りました」

『必殺技』？　　授業の時に使ってた十字架ノ墓クロス・グレイヴとかヴィランに攻撃してたアレの事？」

「はい、十字架ノ墓はまさしく僕が『個性』をコントロールする為に編み出したものです」

アレンは緑谷から距離を取り十字架クロスを発動させた。左腕は瞬時に銀色の巨大な鉤爪へと変化する。

「十字架こを使用している状態での安定した攻撃行為を、必殺技として身体に定着させたんですよ。同じ行動、一連の動きを繰り返してイメージとして頭でも覚える。そうすると、余計な力を込めずに十字架クロスを扱えるようになりました」

説明の途中でアレンは緑谷から少し離れた方を向いて十字架クロスを構え、そして振るう。

「十字架ノ墓！」

地面に叩きつけられた力は地割れや隆起、砂埃など様々な形で現れる。その規模は緑谷がいる位置の直ぐそばにまで及んだ。

「こんな感じで今ではイメージ通りに使いこなせます。緑谷は『個性』を制御している自分がイメージできますか？」

「制御している自分……。一昨日、一度だけヴィランを殴った時腕が壊れなかったんだ。初めて人間に使おうとしたから無意識のうちに力をセーブしたんじゃないかって」

緑谷は昼休みにオールマイトと話した内容を思い返しながら喋る。

殴った瞬間のイメージは忘れないようにずっと反芻していた。

「なるほど……。それなら取り敢えず、そのイメージで僕に殴りかかってください。もちろん『個性』を使って」

「へ？」

「もし力が抑えきれなかったとしても、十字架クロスで受け止めれば大怪我しないと思います。なので僕の心配は要りません」

アレンは無言を言わず、左腕を自身の体格程の大きさまで巨大化させ地面に突き立て固定させ構える。緑谷からはアレンの姿が十字架クロスに隠れている。

「緑谷は自分が怪我しないように制御する事だけを考えて殴ってください」

銀色の腕の陰に姿は隠れ声のみが緑谷に届く。どんな表情をしているのか緑谷からは見えないが、その声から真摯な思いは伝わっていた。

訓練とは言え、未だに制御できていない力をクラスメイトに向かって振るう事に迷いを感じていた緑谷。しかしアレンの声を聞いた事でそれを断ち切った。

「それじゃあ、いくよ……!」

「ええ。どうぞ!」

すう、と息を吐きながら右腕を後ろに引く。

(電子レンジのワットを下げ、卵が爆発しないイメージ。……そしてあの時の腕が折れなかったパンチ)

緑谷は脳内で何度も何度も、繰り返し、イメージを反芻させながら十字架クロスに殴りかかる。

(卵が爆発しない、爆発しない、しない。腕が折れない、折れない。爆発しない。折れない)

「Smash!!」

緑谷の拳が十字架クロスに突き立てられる。

両者ともに全く動じず、二人の間を風が突き抜ける。

「……!」

「!」

「痛い……」

アレンは十字架の陰から顔を出す。そこには右手を抑え蹲る緑谷。アレンからは予定外の痛みに地味に悶絶しているように見えた。心配になったアレンは十字架を小さくさせ近づき、しやがみ込んでいる緑谷を覗き込む。

「大丈夫ですか？　赤くなってますけど。まあ、折れてないようになによ……—ん？」

「ダメだダメだ。卵が爆発しないイメージとヴィランに対して攻撃した時の記憶がゴチャゴチャになってた。ワン・フォー・オールを使う事への意識が薄くなってた。怪我しなかった結果を思い出しても意味ないんじゃないか……？　殴った瞬間の記憶を思い出して……いや、違う。そうじゃない。出力を抑える事を考え過ぎてたんだ。今はまだ100か0なんだ。そりゃ出来る限り小さくしようとしたら0になるよな。当たり前だ。だったら——」

アレンは痛くてしやがみ込んでいると思いついたが、そんな事はなかった。緑谷はぶつぶつと只管呟いていた。

「あの、えつと……緑谷？」

「——なるべく単純に……。あ、ごめん」

アレンに声を掛けられた緑谷は、やってしまったという表情で謝罪した。

「つい考え込みじゃって……。亜蓮くんもこんな感じの訓練してたの？」

「僕の場合、制御できなくても自分の身体へのダメージは心配無かったので、緑谷よりは気楽にやらさ、……やってみました」

アレンは一瞬言葉に詰まるも話を続ける。

「……あと最近は何目的や結果を意識してます。何の為にこの力を使うのか。威嚇の為、救助の為、勝利の為……。目的意識がはっきりしていればどの程度の威力が必要になるかより明確になりますから」

「目的……か……」

再び考え込み始める緑谷に苦笑しつつ、アレンは雄英の実技入試のことを思い返していた。

アレンは試験終了間際に一人の生徒を救ける為、巨大仮想ヴィランに立ち向かった。十字架クロスを十全に扱う自信はなかったものの身動きの取れない生徒を背にして全力で攻撃したのである。

しかし、その場面を見ていたという毒島は、あれは100%の力ではないとアレンに伝えていた。100%の十字架クロスの力即ち、初めて十字架クロスを発動させ暴走したアレンを知る毒島の言葉に間違いはない。では、何故アレンの意思とは裏腹に力がセーブされたのか。それは救ける為に『個性』を発動させたからだとアレンは結論付けた。

あの時アレンの意思通りに100%の力で十字架クロスを開放していた場合、ほぼ確実に暴走していた。これはその後の訓練でも100%は制御できなかった事から確信した。

あの場面で十字架クロスを暴走させていたら、救けたいと望んだはずの生徒すら巻き込んで大きな被害を引き起こしただろう。

アレンは無意識のうちにその可能性を恐れていた。だからこそその時点で制御可能な範囲の力で仮想ヴィランに対抗したのである。

この一件でアレンは十字架クロスを制御するコツを掴んだ。その結果、一時的に相手の行動を止める為の攻撃、投降を促そうと実力を見せ付ける為の威嚇、感情に身を任せたヴィランを倒す為の一撃、どんな時も意識的無意識関わらず『目的に見合った出力での攻撃』を可能になった。

「今度は僕の全身が見えるようにして、やりましょうか。さっきのだと人に対してって感じじゃなかったですね」

「え、ああ。うん、お願い！」

その後、二人の訓練は緑谷のケータイが鳴り慌てて帰宅の準備を始めるまで続いた。



「……ただいま」

帰宅したアレンは普段よりも疲労していた。肉体的に、というより精神的に、だ。訓練は怪我なく終わったが中々疲れるものであった。

拳が十字架クロスに直撃する寸前まで、緑谷の『個性』がちやんと発動しているのかがわからない。よって毎回100%の力で殴られる事を想定して構えなければならなかった。集中力を持続させる必要があった為アレンにとっても良い訓練になったと言える。

「おかえりー」

「おかえりなさい」

リビングでくつろいでいた弾と硝子がアレンを迎える。

そんな二人に対してアレンは開口一番。

「お腹空いた……」

● REC 孤児院

私の名前は玻璃硝子。プロヒーロー、ドクが運営する孤児院に二年前から暮らしている中学三年生の少女。

これは、そんな私が暮らしている孤児院のとあるひと時の記録。



時刻は早朝6時過ぎ。私は『ドクヒーロー事務所』の敷地内にある訓練施設『トレーニングホール』にいる。ここでは2人の少年が組み手を行なっている——はずだったけど、今は休憩中の様子。話を聞いてみましょうか。

「お二人はいつもこの時間に訓練をされているんですか？」

「ん？ 唐突な質問、というかその口調とそのカメラは？」

「これは昨日買ったばかりの新品。とても、とっても、使いたくて堪らなくなつたの。なので、インタビューでもしようと思つて……。口調は……。それっぽくしたかったのよ。いいでしょう？ 別に。さあ、質問に答えて？」

「……ええと、そう、訓練についてでしたね。最近は基本的に僕一人で訓練なんですけど、今日は久しぶりに弾と一緒にですね」

微笑みながらそう答えたこの白髪の少年は、亜蓮行人。彼はこの孤児院の設立時からいる古株。そのせいなのか敷地内の施設や構造、規則には大半の職員より詳しい。

そして、雄英高校に通う高校一年生だ。そう、雄英高校、先日ヴィラン連合を名乗る集団から襲撃を受けた事は未だに注目の高い話題である。

「先日襲撃事件がありましたけど、何かお話聞いてもよろしいですか？」

「よろしくない。流石にそれは無理ですよ。言っちゃいけない事が多いし……。でも、まあ、もつと頑張らなきゃとは思つた……」

……。どうやらあの事件は、良くも悪くも行人に対して大きな影響を

与えたらしい。

「なるほど。ところで体育祭の日が迫ってますが、意気込みを聞かせてもらっても？」

「師匠から『優勝しろとは言わない。けど、優勝しなかったら……まあ、ふふっ。楽しみにしとけ』って言われました……。優勝目指して頑張ります……」

あ、表情が消えた。死んだ目になってる。可哀想に……。

さて、弾にもインタビューしないと。

「最近、訓練されてないとの事ですが、何かあつたんですか？」

「俺は訓練したいんだけどさ。行人からも師匠からも受験生なんだからもつと勉強しろってうるさくて……。今日みたいに、偶にしか付き合ってくれないだよなあ」

訓練の疲れのせいか、はたまた勉強のストレスのせいか億劫そうにしている少年の名前は、伸張弾。私と同じ中学三年の受験生……。雄英志望だけど学力に関しては不安しかから、少なくとも入試までは勉強に集中して励んでもらいたい。

(同じ学校に通いたいし……)

この2人はドクの弟子であり、プロヒーロー直々に鍛えられている。尤も対人戦闘の手解きを受けているだけなので弟子というのは、少し大袈裟なような気もする。

救援ヒーロー『ドク』彼女は災害救助、治療が主な活動のヒーローだから、ヴィランと戦闘する事はほとんどない。『自分が負傷し動けなくなれば救ける事の出来る人々が救えなくなる』からだと本人は言っていた。けれど、当然、戦わなければならぬ場面はある。そんな時は決して怪我を負わない立ち回りでヴィランと戦っていた……。

彼女の格闘術の基礎は回避。ドクはその『個性』の体質上、短時間の接触、接近だけでヴィランを行動不能にし捕らえる事が可能。医療従事者としての立場もあって、無用な怪我を負わせない為にも積極的に攻撃しない。話術で相手の攻撃を誘導し、それに合わせてカウンターを仕掛ける。これがドクの基本戦法である。

弟子である2人はこの戦法を身に付けている。もちろん、ドクと比

較すると完成されているとは言えないレベルではあるが。

いくつか質問をしていると、突然ホールの扉が開かれる。

「お、やっと来た」

そう呟いた弾の視線の先にはぐったりとした毒島がゆったりと歩いていた。顔色は悪くないが、なぜか不健康そうな気配を漂わせている。首には初めて見るチョーカーを着けている。後頭部あたりに手を当てながら口を開いた。

「お早う。……アツプは済ませてるな？ ……まず弾と私。適当にアレンが交代か参加」

「おうー」

毒島先生が一言、二言言い終わると二人の組み手が始まった。弾が突きや蹴りで攻めて、毒島先生は只管防御している。

「休日は一日中寝てるのに……珍しいわね」

「そんなことないですよ。最近、休みの日は、この時間に僕らと一緒に特訓してます。とは言っても、今月は初の休日ですけど」

「ふくん……ん？ 『僕らと一緒に特訓してます』って、先生自身の特訓にもなってるの？」

行人の言葉に引つ掛かりを覚えた私は聞き返した。

勿論、毒島先生も技術を衰えさせないために、向上させるために訓練を定期的に行っている。しかしそれは『特訓』と呼ぶほどのものではない。

『個性』のデメリットを克服する技を完成させるために最近始めたんですよ」

「先生の『個性』のデメリット……。確か、疲労が溜まるのと時間が掛かる、だったかしら」

「それは、それまでに生成した事のない毒薬を生成する場合のデメリットですね。一度、生成したものは割と楽らしいですよ？ 今回

の特訓で克服を図っているのは『個性』の連続使用によるデメリットです。師匠、毒島薬理の『個性』のデメリットには段階があります。まず第一段階が精神的な疲労、そのまま使い続けると第二段階の過剰な

眠気に襲われます」

アレンの解説の途中も毒島先生と弾の組み手は続いている。毒島先生の動きが以前見学した時と少し違うように見える。避ける動作よりも受け止める回数が多く感じる。

「本来ならこの段階で眠りに就くので、それで終わりです。しかし、ここで師匠が思い付いたのが『常に眠気覚ましオーバークの薬を体内に生成しとけば良いじゃん』です」

(……えええ。仮にも薬剤師がそんな考えで良いのかしら)

『個性』の過剰使用オーバークに脳は耐えきれず身体を休ませようと睡眠を促すが、薬により阻まれ活動は止まらない。そんな状態に陥ります」

「それって大丈夫なの？ 身体的にも精神的にも」

「大丈夫じゃありませんでした。ハイになります。リミッターが外れて身体機能は上昇しますが思考は単純に口調は短絡的に行動は直線的になります。早い話が暴力的な性格に変化します。しかも時間が経過するほど強まる。通称、ドレーピング・ホリック狂化中毒。一度なってしまうと眠るまで戻りません」

嘩然。デメリットを打ち消そうとして、新たなデメリットを生み出している。

「……もしかして……今それ？」

「はい。まさしくドレーピング・ホリック狂化中毒ですよ。それをある程度制御することが師匠の特訓ですから」

そこで行人はふと思いついたように問いかけてきた。

「——というか、硝子は知らなかったんですね。いつも師匠の手伝いもしてるのに」

「私がやってるのは、薬品の整理とか簡単な事務仕事の手伝いよ。いくら先生の部屋にいる事が多くても知らない事は知らないわ」

毒島先生は弾に殴りかかり、避けられた。先程まで防戦一方だった先生が徐々に攻めに転じていた。

いつものカウンター戦法ではなく積極的に攻撃している。この戦いはドレーピング・ホリック狂化中毒(何だこの名前)故という事なのだろうか。

「どうした!?! そんなもんか? ああ!?!」

乱暴な言葉とともに先生が果敢に攻める。打撃技では弾の『個性』の性質上、効果的なダメージは与えられない。そんな事は先生も承知のはずだが、殴る、蹴るといった単純な攻撃しか行っていない。おそらく、弾は身体的ダメージを全くと言っているほど負っていない。

しかし、優勢なのは毒島先生だ。攻守が逆転し始めてから5分足らず、弾は唯の一度も攻撃できていない。殴ろうとすれば肩を突かれ、蹴りを放とうとすれば足を踏まれ、攻撃の起点を悉く潰されていた。「身体機能の上昇って、格闘戦で弾に対してあんなに一方的なほどのね」

「狂化中毒ドーピング・ホリックだけが理由ではありませんよ。あそこまで一方的になっているのは師匠が『攻め』のみの戦法だからです。」

「……攻めるだけで、強くなるの？ だったら普段からあの戦い方にしたらいいのに……」

私の呟きに行人は苦笑しながら答える。

「いえ、あれは狂化中毒ドーピング・ホリックの特性によって可能なんですよ。強化された身体——」

行人の説明の最中にも組み手は止まらない。先生の猛攻に弾は対応しきれなくなっている。

「——つと。すみません。そろそろ交代するので、質問は弾にお願いします」

行人は駆け出すと同時に『個性』を発動させ、そのまま真っ直ぐ二人目掛けて突き刺すように伸ばす。

その銀色の鉤爪の介入に弾は後方へ跳ぶことで回避し、毒島先生は両手を横から当てそこに小規模の爆破を発生させる事で軌道を逸らす。

回避した弾は、文字通り跳ねるように移動して私の近くまで下がり、行人と先生から離れた。

弾は座り込んで荒い呼吸を整える。

「……ふう〜。やっぱキツいな」

「少し聞いてもいいかしら？」

「……ん？」

返事をするのが億劫なのか、弾は言葉を発さずに質問を促す。

「あの状態だとどうしてあんなに強いのか？ 身体機能が上昇するとは別に戦い方がどうのって行人が言いかけたのだけれど……」

「知らん——」

「はあ？」

思わず間拔けな声が出してしまった。

「——知らんってか、……聞いたけど理解できなかったから忘れた」

弾らしいと言えば弾らしいけれど、はあ……。

「そう……。なら他の質問、どうしてあの距離で戦い続けたの？ 離れた位置から腕なり脚なり伸ばして攻撃したらいいじゃない」

二人の組み手を見ながら考えていた。

ドレピング・ホリツク
狂化中毒時に使用できないのか使用しなかったのかは分からないが、毒島先生は毒を使わなかった。つまり、離れた相手に対する攻撃手段がなかった事になる。

ならば、弾は先生から距離を取り遠距離攻撃に徹する事が最善の策だったのではないかと。

しかし、弾は行人と交代するまで後退する事はなかった。

……オヤジギャグ……。

「訓練だからな」

「え？」

下らない事考えて、ぼーつとしてた……。気をつけないと。

「これが本番、ヴィラン相手の戦闘だったら俺も距離を取ったけどさ。でもまあ訓練だし、好きなやり方で良いかなあ、と思った」

「いい加減なのね」

「適当にやってんだよ。有利な状況でなくとも勝つ為の訓練だと思えてくれ。師匠も攻撃手段に『個性』を使っただけ以上、俺も『個性』を使った攻撃はしたくなかったし」

「ふーん……そういえば行人も最初の一撃以外『個性』を使っただけね」

弾と先生の組み手とは異なり、先生の動きに行人が対応している。

先程は弾が攻撃を仕掛けようとする度に、先生はその起点を悉く潰

していた。今回は行人からは攻撃せずに、先生の行動に合わせて動いている。常にカウンターを狙った動きをしている。

「あの事件があつてから『個性』の訓練より体術やら素の格闘訓練ばかりやってる。『個性』は学校で、基礎はここで訓練するってさ」

「基礎ねえ……。弾はどうなの？ さっきは真正面からの殴り合いだったけれど……。カウンターは仕掛けなかつたわね？」

ふと思いついた疑問を弾に投げかけると唇を尖らせ露骨に目を逸らされる。何となく聞いてみただけなのに……。

「……あの状態の師匠と向き合つてると、落ち着かないというか、こう……、思わず攻撃したくなるんだよ。多分、そういう感じの興奮剤的な何かを放出してる可能性も——」

「いや、行人は冷静に組み手してるのだからそれはないでしょう。弾の性格の問題ね」

そんな会話をしている内に、初めはなんとか対応できていた行人も徐々に明確に劣勢になっていった。今やほとんどの攻撃をそのまま受けている。行人の表情は痛みによつて歪んでいる。

「おいおい、そんなもんか?! ああ?! 未熟な技でどうにかできるわけねえだろ!! その不完全な『個性』でも使ってみろや!!」

(……………。先生の口調は最早チンピラのものになつてゐるわ。アレを聞いて「あ、ヒーローだ」と思う人は極少数でしょうね……)

「あと少しだから俺もやってくるわ。そろそろ行人1人だと辛そうだし」

言うが早いか、弾は2人の組み手に乱入した。一気に距離を詰めながら、そのスピードを拳に乗せて先生へ殴りかかった。

組み手の状況は二対一から二対一の戦闘へと変わる。流石に直々に鍛えている弟子2人を相手にするのは厳しいのか、先生の攻撃回数が格段に減っている。それでも圧倒的な反射スピードによつて戦況は均衡している。

組み手が始まってから30分は経ち、このまま組み手は続くかと思われたが、不意に毒島先生の動きが止まる。そしてパタリと仰向けに倒れてしまった。

「ふう〜……。終わったー」

「……僕らもギリギリでしたね。はあ……さて、師匠を部屋に運びますか……」

「最初は、グー！」

先生が倒れてから一息ついた行人と弾は声を揃えて拳を突き出しジャンケンを始める。

「——ジャン、ケーン、ポン！」

出された手は弾がグーで行人はパー。行人の勝ちだった。負けた弾は若干項垂れつつ、床に仰向けになっっている先生を起き上がらせ背負った。訓練後のせいかな辛そうに見える。

気になることがあるので、出口のある此方へ歩いてきた2人に疑問を投げかけた。

「先生はどうしたの？　2人が慌ててないなら、大丈夫なんですよけど」

「時間になったので寝ただけですよ。ほら、このチョーカーで予め設定した時間に睡眠薬を体内に注入したんです。こうでもしないとドーピング・ホリック狂化中毒は止められないとか」

行人が弾に背負われてる先生の首元を指差しながら説明してくれる。

弾はあまり先生に振動が伝わらないようにと気を付けているとはいえ、移動中そして近くで会話もしているというのにまるで起きる気配がない。

近くまでくると微かに寝息が聞こえる。先程まであんなに激しい格闘をしていたとは思えない程、安らかな表情で熟睡している。

「狂化中毒ドーピング・ホリックを打ち消す程の睡眠薬だから、かなり強力らしいぜ。目が覚めた後も暫くはぼーっとしてたし」

「そうですね。10分近くは簡単な会話しか出来なかつたですね。しかもその話した内容も全く記憶にないみたいでした」

『個性』のデメリットを打ち消す為の技のデメリットが重過ぎる気がする。これは本末転倒なのでは？　結局眠ってしまう点が解決できていない。むしろより深い眠りに就く分悪化している。

「……硝子が考えてる事はわかりますよ。でも師匠は割と納得してるようなので何か考えがあるんでしょう、たぶん……」

本人があまり信じていない事が語尾に表れている。アレンは毒島先生の事を、信頼できる存在だとは思っているが信用していい性格だとは思ってない。

「まあ、いいわ。それよりも、先生今日はずっと寝てるって事？　平

気なの？　仕事とか」

「確か……出張、だったかな……。出張があつたと思いますよ。今日から一週間は出張で事務所を空けるとか言っていました」

「大丈夫大丈夫。時間になったら、そのチャーカーから眠気覚ましの薬が出てくるから。昼過ぎに出るとかだったから、12時頃には起きるだろう」

弾が疑問に答えてくれた。

「それは便利ね。私も目覚まし時計として欲しいわ」

指定した時間にほぼ確実に起きる事ができる。というか強制的に覚醒される。これはいざという時に役に立つかも知れない。

「あれ、師匠にしか使えないらしいですよ。普通の人には健康を害する恐れがあるとか何とか……危険な薬物でも配合されてるかも知れませんが、はは……」

冗談を言っているようにも聞こえるが、割と本心なのは……。先生ならやりかねないという斜め上な信頼。流石、10年以上の付き合いなだけはある。

（確かにあの人の人間性から考えるとあり得るわね。違法薬物なんかも配合されてるかも知れない……）



いや、これ、投稿できない……？　出来ないでしょうねえ……。

だってドーピング・ホリック狂化中毒とか、これ絶対公開しちゃダメなやつじゃない……。

仕方ない。いつ投稿できるかも分からないし、編集するのも暫く様

子を見てからにしましょうか。

えっと、今時間は……14時18分、ね。という事は先生はもう出かけてるのかしら？

さて、邪魔者も消えた事だし家捜しに行きましようか。普段は時間が足りなくて調べられない場所も一週間もあれば十分でしょうし。一つでも多く弱みを見つけないと。

——復讐の為に。